淡河木津遺跡

第1次・第2次発掘調査報告書

－淡河地区農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2002

神戸市教育委員会

淡河木津遺跡

第1次・第2次発掘調査報告書

－淡河地区農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2002

神戸市教育委員会

序

神戸市北区淡河町は、六甲山地を南に控えた丹生山地の北側に位置しており、神戸市域においても特に豊かな自然に恵まれた、緑豊かな地域であります。またその一方で、茅葺き民家や古社・古刹、さらに古くから伝わる神事や伝統芸能など、貴重な文化財を今に残し、歴史ある風土を持つ地域としても知られています。

また当地域におきましては、農業の活性化・合理化に向けて、淡河地区農業基盤整備事業とし、周辺における圃場の整備に努めてきました。木津地区の圃場整備事業着工に先行して実施しました埋蔵文化財発掘調査においては、鎌倉時代から室町時代を中心とした、先人たちの営みの跡を発見しました。その中には建物跡に伴い、屋敷地の一角を占めていた庭園の園池と推定される遺構が発見され、この地に生きた当時の人々の文化の一端を知ることができました。そしてこの度その成果につきまして、報告書を刊行する運びとなりました。

本書が埋蔵文化財の存在について、現代に生きる我々にとっていかなる意味を持つのかを知る、一助として活用して頂ければ幸いと存じます。最後に、発掘調査ならびに報告書の刊行に際しましては、多くの方々の御協力を賜りました。関係諸機関、並びに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

神戸市教育委員会
教育長　木村　良一

例　言

1．本書は、神戸市教育委員会および財団法人神戸市体育協会が、神戸市北区淡河町木津において実施した、淡河木津遺跡の第１・２次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．当発掘調査は、淡河地区農業基盤整備事業に伴うもので、第１次調査については神戸市教育委員会が神戸市農政局（現産業振興局）に、第２次調査については財団法人神戸市体育協会が神戸市産業振興局からの委託を受けて実施した。

3．発掘調査の組織については本文（第１章第２節）に記した。

4．発掘調査に際しては、神戸市農政局（現産業振興局）・同産業振興局・神戸市淡河土地改良区の御協力を得た。

5．本書において用いる方位・座標は、平面直角座標系第Ⅴ系で、遺構実測図における方位は座標北を示すものである。標高については、東京湾中等潮位（T．P.）による。

6．本書に掲載した遺跡位置図は国土地理院発行の５万分の１地形図「神戸」および２万５千分の１地形図「淡河」・「有馬」を、調査地位地図は神戸市都市計画局発行の２千５百分の１地形図「淡河天神橋」・「曇ケ滝」を使用した。

7．遺構の実測は各担当者が行い、市元塁・牛尾大祐の補助を得た。遺物の実測は各担当者が行った。また遺構・遺物のトレース図作成および本書の執筆は西岡巧次・中村大介が行い、編集は中村が行った。

8．遺構ゲ真の撮影は各担当者が行い、遺物ゲ真の撮影は、金属および関連遺物のＸ線透過像、顕微鏡ゲ真（千種・中村撮影）を除き、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　牛嶋茂氏の指導を得て、杉本和樹氏が行った。

9．第１次発掘調査の園池状遺構については、兵庫県立須磨友が丘高等学校教頭　西　桂氏（現兵庫県立青雲高等学校校長・神戸市文化財保護審議委員）に御教示いただいた。

10．発掘調査で出土した遺物および図面・写真等は神戸市教育委員会が管理・保管している。

目　次

序
例言
第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 3
　　（１）調査体制 …… 3
　　（２）調査日誌抄 …… 6
　第３節　遺跡の立地と歴史的環境 …… 7
　　（１）遺跡の立地 …… 7
　　（２）歴史的環境 …… 7
第Ⅱ章　第１次調査の成果 …… 11
　第１節　調査の概要 …… 11
　第２節　遺構と遺物 …… 12
　　（１）１区 …… 12
　　（２）２区 …… 12
　　（３）３区 …… 12
　　（４）６区 …… 14
　　（５）７区 …… 14
　　（６）８区 …… 17
　　（７）９区 …… 17
　　（８）10区 …… 32
　　（９）11区 …… 36
　　（10）12区 …… 41
　　（11）13区 …… 41
　　（12）14区 …… 44
　　（13）15区 …… 44
　第３節　鉄製品生産関連遺物 …… 45
　第４節　小結 …… 50
第Ⅲ章　第２次調査の成果 …… 51
　第１節　調査の概要 …… 51
　第２節　小結 …… 54
第Ⅳ章　まとめ …… 55
　第１節　淡河本津遺跡の遺構と遺物 …… 55
　第２節　むすびにかえて …… 56

挿図目次

第Ⅰ章

fig. 1　淡河木津遺跡の位置（1）……1
fig. 2　淡河木津遺跡の位置（2）……2
fig. 3　調査地区配置図……5
fig. 4　周辺の遺跡分布図……9

第Ⅱ章

fig. 5　1・2・3区出土遺物……12
fig. 6　6区・7区北半部遺構平面図……13
fig. 7　SB01平面・断面図……14
fig. 8　SB02平面・断面図……15
fig. 9　SK01半裁・断面図……15
fig. 10　9区遺構平面図……16
fig. 11　SB03平面・断面図……17
fig. 12　SB04平面・断面図……18
fig. 13　SB05平面・断面図……19
fig. 14　SB03・04出土土器……20
fig. 15　SK02・04出土遺物……21
fig. 16　SK02・03・04平面・断面図……21
fig. 17　9区SP出土土器……22
fig. 18　9区SP出土遺物……23
fig. 19　ST01平面・断面・立面図……23
fig. 20　ST01出土遺物……24
fig. 21　園池状遺構平面図……25
fig. 22　SX02・05平面・断面・立面図……26
fig. 23　SX02出土遺物……27
fig. 24　SX02出土鉄製品……28
fig. 25　SX03・04・SD04平面・断面・立面図……29
fig. 26　SX03・04・SD04出土土器……30
fig. 27　9区包含層出土鉄製品……31
fig. 28　10－南区遺構平面図……32
fig. 29　SK07・08平面・断面・立面図……33
fig. 30　10－南区出土遺物……34
fig. 31　10－南区出土鉄製品……35
fig. 32　11区出土石器……36
fig. 33　11区遺構平面・南壁土層断面図……37
fig. 34　SB06平面・断面図……38
fig. 35　SB07平面・断面図……39
fig. 36　SX01・SD02・03断面図……39
fig. 37　11区出土遺物……40
fig. 38　13区遺構平面・南壁土層断面図……41
fig. 39　SB08平面・断面図……42
fig. 40　SE01～04半裁・断面図……43
fig. 41　13区出土遺物……43
fig. 42　15区包含層出土遺物……44
fig. 43　鉄製品年産関連遺物分布状況……45
fig. 44　輸羽口・炉壁……46
fig. 45　鋳型……47

第Ⅲ章

fig. 46　第2次調査遺構平面図……52
fig. 47　SB01平面・断面図……53
fig. 48　SE01平面・立面図……53
fig. 49　第2次調査出土遺物……54

表目次

第Ⅱ章

表1　11区出土石器計測表……36

カラー図版

C．PL．1　淡河木津遺跡遠景　西より
　　園池状遺構　南より
C．PL．2　ST01　北東より
　　ST01出土遺物
C．PL．3　ST01出土龍泉窯系青磁碗
　　〃
C．PL．4　第1次調査出土鋳型
　　第1次調査出土輸羽口

図版

第1次調査

PL．1　1区全景　北より
　　3区中央部　北より
PL．2　6区全景　西より
　　7区全景　北西より
PL．3　SX01　南西より
　　8区全景　北東より
PL．4　9区全景　北より
　　9区遺構集中部　北より
PL．5　9区遺構集中部　南より
　　SB03および園池状遺構　北西より
PL．6　SB03－P5断面　南より
　　SB04－P8断面　南より
　　SB05　東より
PL．7　SK03検出状況　南西より
　　SK05・06　北より
PL．8　ST01　北東より
　　ST01　東より
PL．9　園池状遺構全景　北西より
　　園池状遺構貯水状況　西より
PL．10　SX02・05　北西より
　　SX02断面　西より
PL．11　SX03・SD04　北西より
　　SX03石組み断ち割り　南東より
PL．12　SX03導水路　南西より
　　SX03導水路断面　北東より
PL．13　10－南区第1遺構面全景　北東より
　　SK07炉床検出状況　東より
　　SK07断ち割り　南東より
PL．14　SK07炉床下層施設　南より
　　10－南区第2遺構面全景　北東より
PL．15　11区全景　東より
　　SD06　東より
PL．16　13区全景　北西より
　　SE02　西より
PL．17　3区出土石製　表・裏
　　9区SB出土土器
　　9区SK出土遺物
PL．18　9区SP出土遺物
　　SP211出土紙石
PL．19　ST01出土青磁碗
　　SX02出土遺物
PL．20　SX03出土土器
　　SX04・SD04出土土器
PL．21　10－南区出土遺物
　　11区出土石器　表・裏
PL．22　11区出土土器
　　13・15区出土遺物
PL．23　3区出土金属製品・（同X線透過像）
　　9区出土金属製品・（同X線透過像）
PL．24　ST01出土鉄製品・（同X線透過像）
PL．25　10－南区出土金属製品1・（同X線透過像）
　　10－南区出土金属製品2・表・裏
　　10－南区出土金属製品2　X線透過像
PL．26　11区出土金属製品・（同X線透過像）
　　13区出土金属製品表・裏・（同X線透過像）
PL．27　出土炉壁　表・裏・（同X線透過像）
PL．28　出土鉱滓1
　　出土鉱滓2　表・裏
PL．29　出土鉱滓1　X線透過像
　　出土鉱滓2　X線透過像
PL．30　鉄製品年産関連遺物断面顕微鏡写真1
PL．31　〃　2

第2次調査

PL．32　調査区全景　北より
　　調査区南端　北より
PL．33　SE01　北より
　　〃　東より

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

神戸市北区淡河町は、神戸市域を横断する六甲山地の北側、丹生山地の北面に位置し、三木市および美嚢郡吉川町に接している地域である。旧国制においては播磨国の東端に当たり、現在の八多町との境界において、東の摂津国と接していた。『美嚢郡誌』によれば、この周辺はかつて「泡河湖」と呼ばれる広大な湖の水面下であり、それが宝亀11年（780）に決壊したことによって、湖底があらわれたとされている。しかし、近年の圃場整備事業や、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査において、縄紋時代（淡河中村遺跡・萩原遺跡）や弥生時代（勝雄遺跡）の生活址が検出されはじめ、淡河町は、泡河湖の伝承以前から人びとの生活の舞台であったことが、明らかになってきている。

淡河木津遺跡の所在する木津地区は、北区八多町屏風を源とし、三木市に入り志染川と名称を変える、淡河川の中流域の左岸、標高約150mの河岸段丘上に位置している。木津（キヅ）とは幅の狭く、深い谷地形を反映した地名と考えられる。また『美嚢郡誌』には、泡河湖の存在した頃には木材の集散港があったことより起こった地名であるとの記述が見られる。周辺には、淡河城、萩原城、天正寺城等、中世の山城の存在が知られており、淡河中村遺跡、萩原遺跡、行原遺跡といった中世集落址も点在する。

fig. 1　淡河木津遺跡の位置（1）

平成４年、当時の神戸市農政局は、傾斜地が多く表層地盤の軟弱である、当地域の農業効率化を目ざし、淡河地区農業基盤整備事業の一環として、木津地区における事業計画を策定、これに基づいた埋蔵文化財試掘調査依頼書を、同市教育長に提出した。これを受けて同市教育委員会文化財課は、平成４年12月11日より平成５年１月19日にかけ、事業計画地内において試掘調査を実施した。調査の結果、中世の遺物包含層および遺構の存在を確認した。この結果に基づき、工事によって埋蔵文化財に影響が生ずると考えられる部分、約4630㎡（第１次）・約1000㎡（第２次）について、発掘調査の必要があるとの回答を行った。結果、鎌倉時代より江戸時代にかけての集落址および縄紋時代、鎌倉～江戸時代の遺物が検出された。

fig. 2　淡河木津遺跡の位置（２）（S=1：25,000）

第2節　調査の経過

（1）調査体制

第1次調査は平成9年度に現地での調査を神戸市教育委員会文化財課が行い、一部の遺物整理作業を同年度に実施した。第2次調査については平成11年度に現地での調査を財団法人神戸市体育協会が行った。平成13年度には神戸市西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターにおいて、両調査の遺物整理作業・報告書作成業務を行った。これらの調査に伴う組織は以下のとおりである。

平成9年度　（第1次調査　現地調査）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当

壇上　重光　神戸女子短期大学教授

工楽　善通　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長

和田　晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本　吉男
社会教育部長	矢野栄一郎
文化財課長	杉田　年章
社会教育部主幹	奥田　晢通
埋蔵文化財係長	渡辺　伸行
文化財課主査	丹治　康明
	丸山　潔
	青本　宏明
事務担当学芸員	安田　滋
	橋詰　清孝
	阿部　功
調査担当学芸員	内藤　俊哉
	川上　厚志
	中村　大介
遺物整理担当学芸員	佐伯　二郎
保存科学担当学芸員	千種　浩

平成11年度　（第２次調査　現地調査）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当

壇上　重光　前神戸女子短期大学教授

工楽　善通　ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田　晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本　昌男
社会教育部長	水田　裕次
文化財課長	大勝　俊一
埋蔵文化財係長	渡辺　伸行
文化財課主査	丹治　康明
	丸山　潔
	菅本　宏明
遺物整理担当学芸員	平田　朋子
保存科学担当学芸員	千種　浩
	中村　大介

（財）神戸市体育協会

会長	笹山　幸俊
副会長	田村　篤雄
専務理事（兼務）	田村　篤雄
常務理事	中野　洋二
常務理事	静観　圭一
総務課長	前田　豊晴
総務課主幹	中西　光男
総務課主幹	奥田　哲通
総務課主査	丹治　康明
事務担当学芸員	斎木　巌
調査担当学芸員	西岡　巧次
	浅谷　誠吾

平成13年度　（第１・２次調査　遺物整理・保存科学的処理）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当

壇上　重光　前神戸女子短期大学教授

工楽　善通　ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田　晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	木村　良一
社会教育部長	岩畔　法夫
文化財課長	桑原　泰豊
社会教育部主幹	渡辺　伸行
埋蔵文化財調査係長	丹治　康明
文化財課主査	宮本　郁雄
	丸山　潔
	菅本　宏明
保存科学担当主査	千種　浩
遺物整理担当学芸員	黒田　恭正
保存科学担当学芸員	中村　大介

（財）神戸市体育協会

会長	笹山　幸俊
副会長	鞍本　昌男
	山田　隆
	家治川　豊
	木村　良一
専務理事（兼務）	鞍本　昌男
常務理事	梶井　昭武
参事	財田　美信
総務課長	前田　豊晴
総務係長	松田　保
総務課主査	丸山　潔
事務担当学芸員	川上　厚志

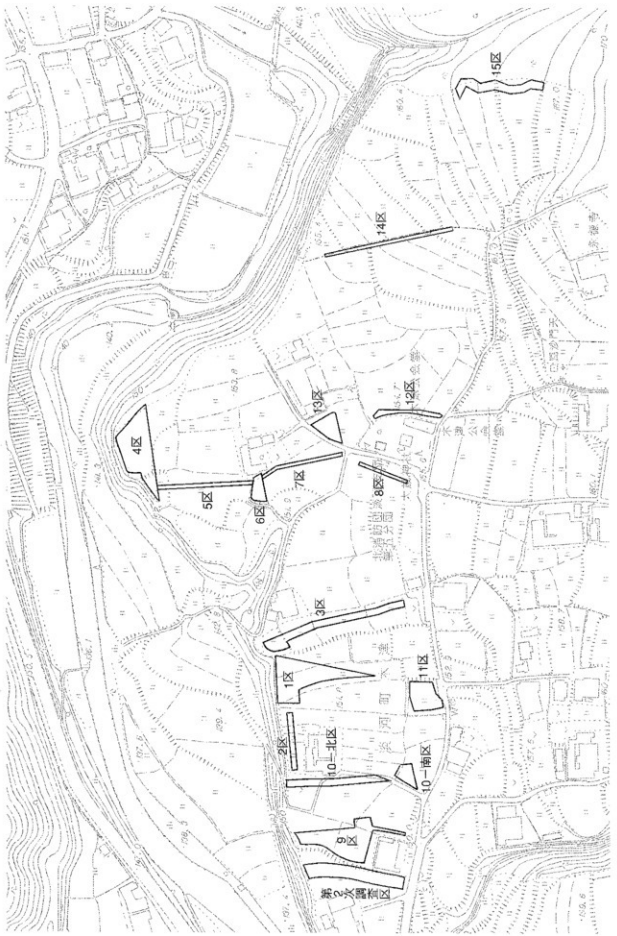


fig. 3　開発地区配置（S=1：2,500）

（2）調査日誌抄

平成4（1992）年12月11日	試掘調査実施
平成5（1993）年1月19日	
平成7（1995）年1月17日	神戸を阪神・淡路大震災が襲う
平成9（1997）年5月7日	第1次調査1区、調査開始
26日	2・3区、調査開始
6月13日	1～3区、中・近世の圃場開発跡を確認
8月6日	4～6区、調査開始
8日	7・8区、調査開始（8区近世圃場段確認）
	6・7区、中世掘立柱建物跡検出
28日	9区、調査開始
29日	6～8区、基準点測量実施
9月11日	9区、中世遺構面精査、土坑・柱穴・溝等検出
12日	9区、中世墓（ST01）検出
19日	9区、基準点測量実施
29日	10・11区、調査開始
10月16日	9区、SX02・03掘削、護岸石組み確認
17日	10－南区、近世鉄器生産関連遺構検出
11月4日	12～15区、調査開始
10日	10・11区、基準点測量実施
28日	9区、園池状遺構周辺クレーンによる空中写真測量
12月2日	兵庫県立須磨友が丘高校教頭（当時）西 桂氏来訪、園池状遺構について御教示頂く
15日	13区中世遺構面全景写真撮影
平成10（1998）年1月9日	12～15区、基準点測量実施
22日	第1次調査終了、引き渡し
平成11（1999）年4月14日	第2次調査開始
26日	近世石組み井戸（SE01）検出
5月6日	中世柱穴群検出、掘立柱建物確認
12日	中世遺構面全景写真撮影
13日	基準点測量実施
18日	調査終了、引き渡し

第3節　遺跡の立地と歴史的環境

（1）遺跡の立地

淡河木津遺跡は先述のとおり、淡河川の中流域、標高約150 m前後の中位段丘上に位置している。淡河川流域では蛇行する川の流れによって、長年のあいだに浸食と堆積を繰り返しながら河岸段丘を発達させた。そして段丘上に大小の平坦地を形成し、そこはしばしば人びとの生活の営みの舞台となってきた。

当遺跡の存在する木津地区には、川が弧状に屈曲する内側に開けた緩斜面地が広がっており、宅地および水田としての土地利用がなされてきた。この平坦地の北側は、流水に削り取られた急峻な段丘崖である。一方南側は、丹生山地の山並みが押し寄せ、緩斜面の先端部は断層地形によって山塊との明確な境界が引かれている。今回、埋蔵文化財の存在が認められ、発掘調査を実施するに至った区域は、段丘上においては比較的縁辺部に当たり、巨視的には北へとなだらかに下ってゆく場所である。

（2）歴史的環境

淡河町には現在においても、室町時代の建築として著名な古刹石峯寺や、伝統的な茅葺き民家、農村歌舞伎舞台、また県指定重要無形文化財である、勝雄の淡河八幡神社の御弓神事など多くの貴重な文化財が存在し、当地が豊かな歴史に恵まれた土地であることを物語っている。また近年は各種開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が相次ぎ、現在は地下に埋もれてしまった地域の歴史が明らかとなってきている。

ここでは淡河町域で確認されている代表的な遺跡から、その歴史的環境について概観する。なお、遺跡名に付記した番号は、fig.4の遺跡番号と対応している。

縄紋時代　淡河町内で現在までに確認されている最古の遺物は、萩原遺跡（17）より出土した、縄紋時代初頭のものと考えられる、有茎尖頭器である。また前期の遺物では、淡河町中山に所在する中山大柚池遺跡より出土の土器がある。さらに中期に入ると、淡河中村遺跡（26）から中央に石囲い炉を持つ方形の竪穴住居址が検出され、土器片をはじめ、石皿・磨石・石錘などの生活用具や祭祀具である有頭石棒などが出土している。後期では、焼失した痕跡の残る、不整楕円形の竪穴住居址が検出された萩原域遺跡（18）や、後期中葉の縁帯文土器が出土した竪穴住居址や、土坑を検出している萩原遺跡などが知られる。また、神田遺跡からも後期の土器が出土している。他にも縄紋時代の遺物と考えられるものには、北僧尾地区より石槍が、南僧尾地区の九田遺跡（9）からも石鏃が出土している。

以上より概観すれば、散発的にではあるものの、全国的に見て縄紋遺跡の希薄な神戸市域には珍しく、比較的まとまった資料が得られており、今後当地域において、特に中期から後期にかけての出土例が増加する可能性は高く、縄紋集落のあり方について更なる知見が得られると考えられる。

弥生時代　現在のところ町内の弥生遺跡分布は希薄であり、特に弥生時代前半の様相については不明な部分が多く、行原遺跡（14）・宮ノ沢域遺跡（16）などにおいて中期の土器片が少量出土したのみに留まる。後期終末～古墳時代初頭には、勝雄遺跡より平面形が五角形で屋内にベッド状遺構を持つものと隅丸方形の竪穴住居址が検出されている。また淡河域跡下層からも竪穴住居址が検出され、この頃になると少数ながら散村的な生活形態が発生して

いたものと考えられる。

古墳時代～飛鳥時代

淡河中村遺跡では、古墳時代初頭の竪穴住居址をはじめ、作り付けの竈を持ち、韓式系土器の供伴するものを含む竪穴住居群や掘立柱建物が並立した、古墳時代中期の拠点的な集落址が検出されている。また萩原遺跡では後期の竪穴住居址を検出し、周辺における集落の存在が予測される。後期から飛鳥時代にかけての遺構が検出されている勝雄遺跡では、櫛列址、竪穴住居址、掘立柱建物址等が連綿と築かれていった様相が明らかとなった。

一方、淡河町内においては現在までに古墳の存在は知られていない。削平による消失、または未発見古墳存在の可能性も考えられようが、例えば三田盆地周辺に顕著な群集墳など、周辺地域とは様相を異にすることは明らかであろう。或いは地域集団の由来に相違があった可能性も考えられないであろうか。

奈良時代

奈良時代に入ると勝雄遺跡では、大型柱穴を持つ掘立柱建物を中心とした集落構成を見せる。また出土遺物にも鉄鉢形の須恵器鉢や須恵器薬壺等、一般の集落には見られない遺物が出土しており、この遺跡の特殊性を示唆している。『倭名類聚抄』にある、淡河町を含めた旧播磨国美嚢郡は、風土記に見える「縮見屯倉」の領域内であると考えられている。飛鳥時代以来、勝雄遺跡に見られるこうした特殊遺物の存在は、朝廷直轄地として中央政府の出張所があったことを物語っていると考えられる。

平安時代

平安時代の遺構は、淡河中村遺跡に12世紀前半の石組み井戸２基がある以外は目立ったものは知られていない。これには当地が飛鳥時代より存在した、中央権力の傘下から外れたことが想像できよう。

鎌倉時代

天皇を頂点とした律令体制が崩壊をはじめた平安時代の終わりごろ、各地で台頭しはじめた有力領主層や有力社寺は、荘園を経済基盤として中世封建社会の担い手となってゆく。現在の淡河町域も荘園制度下にあったようで、淡河町神影の石峯寺も、平安時代から鎌倉時代にかけて隆盛を見たと伝えられる。『石峯寺文書』には「播磨国淡河御庄内　石峰寺」とあり、何れかの有力領家の支配を受けていたようである。この時期、おそらくこういった領家勢力の権力流布によって展開した集落が多く存在したものと考えられる。淡河本津遺跡で検出された建物群も、このような経緯から発生した集落であろう。同時期に、平面６角形の緩板組みの井戸を検出した萩原遺跡、敷石のある火葬土坑を検出した行原遺跡、中国・朝鮮半島製の磁器が出土している、周囲を溝と柵に囲まれた屋敷跡を検出した淡河中村遺跡等が存在する。

室町時代

淡河周辺の室町時代に特徴的な遺跡として山城がある。中央より端を発した戦乱は、交通の要衝である淡河の地へも展開した。荘園制は崩壊し、新興の在地領主層は自らの保身と領地拡大のため、独自の防衛線上に城郭を築いた。当時、淡河を領有していた淡河氏の居城と推定されているのは、淡河城・萩原城であり、周囲には天正寺城（22）・東畑城（13）などの存在が知られている。更に信長の「天下布武」計画に則って行われた、秀吉軍による三木城攻め（1578～1580）では、淡河各所に設けられた城が次々と攻略された。毛利方の武将、別所長治についた淡河定範もこの地を追われ、代わって秀吉方の有馬氏に領有されることとなった。平成５～７年度にかけて、圃場整備事業に伴って行われた萩原城跡二の丸の調査では、城郭の形成は16世紀中頃以降であるとの見解が出されており、三木

合戦前後の城郭関連遺構が検出されている。また淡河城の調査も圃場整備事業に先立って、昭和51年度に行われたが、中世城郭に伴うと考えられる遺構は検出されていない。

また当地域には経塚も多く知られており、特に山陽自動車道三木ジャンクションの建設に先立つ調査によって発見された勝雄経塚（30）からは、金鍍金された青銅板製の経筒に納められた法華経８巻が出土した。

そして近世以来、淡河は現在の宝塚市生瀬を起点とし、有馬から三木に至る、湯乃山街道の中継地点として発展し、現在も、淡河本町には参勤交代の本陣跡が残り、往時を偲ぶことができる。また茅葺き民家などの伝統的建造物も保存されており、里山自然の広がる風光明媚な地として、市民に親しまれている。

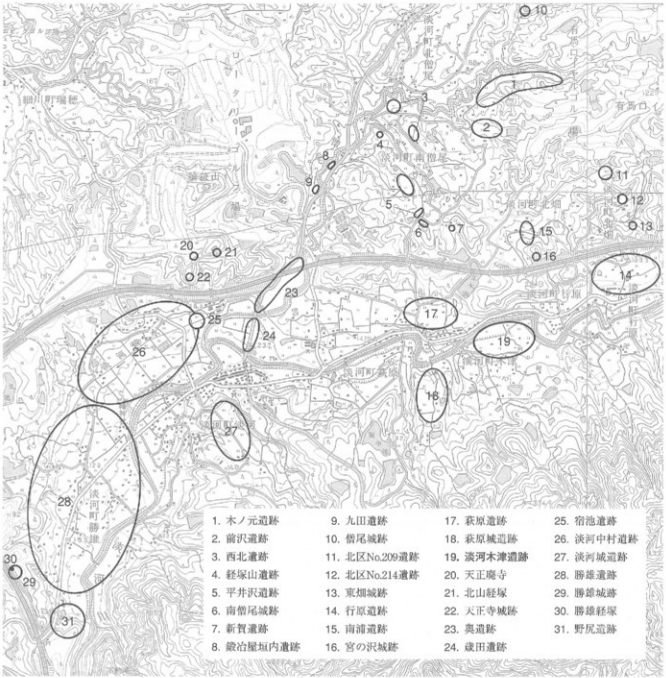


fig. 4　周辺の遺跡分布図（S=1：25,000）

第Ⅰ章 参考文献

阿部敬生編『南僧尾』神戸市教育委員会　2000

有井　基編『改訂版　北区の歴史』神戸市北区役所まちづくり推進課　1996

黒田恭正編『萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－第１・３・５次－』神戸市教育委員会　2001

神戸史学会『新　神戸の町名』神戸新聞総合出版センター　1996

神戸市教育委員会『勝雄遺跡現地説明会資料』　1997

神戸市教育委員会『神戸市埋蔵文化財分布図』　2001

新修神戸市史編纂委員会『新修神戸市史』歴史編Ⅰ　自然・考古　1989

須藤　宏他「行原遺跡第２・４次調査」『平成３年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1993

多賀茂治「宮ノ沢城跡の調査」「奥遺跡　宮ノ沢城跡　淡河上中遺跡」兵庫県教育委員会　1996

丹治康明・阿部敬生「淡河中村遺跡」「平成３年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会　1993

西岡巧次編『勝雄遺跡Ⅰ』神戸市教育委員会　2000

兵庫県史編集専門委員会「石峰寺文書」（徴考録）『兵庫県史　史料編』中世２　兵庫県　1987

兵庫県教育委員会『勝雄経塚』　1997

丸山　潔・松林宏典「淡河中村遺跡」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1994

美嚢郡教育会編『美嚢郡誌』　1924

宮本郁雄編『南僧尾Ａ・Ｂ地点発掘調査概要』神戸市教育委員会　1976

宮本郁雄編『淡河城跡発掘調査概要』神戸市教育委員会　1977

村尾政人編『淡河中村遺跡』淡神文化財協会・淡河中村遺跡調査団　1992

村尾政人・白谷朋世編『淡河萩原遺跡』淡河萩原遺跡調査団・株式会社埋文　1999

第Ⅱ章　調査の成果

第1節 調査の概要

第1次調査は、水田区画の整備および排水路敷設、道路敷設の行われる部分で、試掘調査の結果をもとに、遺構に影響の生じると考えられる部分について発掘調査を行った。

調査にあたっては、発掘調査が必要である部分の15箇所に調査区を設定し、各調査区ごとに1区～15区の番号を付した。

基本層序

1区～3区　調査地は現況が圃場であるため、耕作土直下に中世以降の耕作土である淡灰色シルト質極細砂があり、その下層は黄褐色シルト質礫まじり極細砂の地山となっている。

4区・5区　現況の圃場耕作土直下が無遺物の洪水砂礫層であり、耕作土中に中近世の遺物が混入する。洪水砂礫層上面では遺構は確認されていない。

6区～8区　現況の圃場耕作土の下層は無遺物の黄褐色礫まじり粘土（地山）であり、上面が中近世の遺構面となる。また7区の南半～8区では、地山は明灰黄色シルトへと変化してゆき、この上面にて遺構確認調査を実施した。

9区　現代耕作土および、現況の圃場平坦面の造成盛土の下層に、近世耕作土の黄褐色粘土があり、その下に中世包含層である褐灰色シルト質細砂が堆積している。遺構確認調査は褐灰色シルト質細砂上面と、その下層に堆積し、無遺物の地山層である、黄褐色礫まじり粘土および黄褐色粘土上面で実施した。

10－北区
10－南区　10区は排水路および道路予定地に設定された調査区で、南北に長い北区と平面台形の南区からなる。北区は現代耕作土直下が地山の黄褐色礫まじり粘土である。一方南区は現代耕作土の下層には暗褐色礫まじり細砂、さらに下層に黒褐色礫まじり細砂の2層の包含層が堆積する。これらはいずれも鎌倉時代から室町時代後期にわたる遺物を包含している。

11区　11区は東部においては、現代の耕作土の直下で遺構の基盤層である黄灰色粘土となり、中央部から西部にかけては、中近世包含層である灰黄色土、暗灰色土を挟んで遺構基盤層である黄灰色粘土、黄茶色土となる。

12区　現代耕作土、現代床土の下層に、中近世包含層である灰黄色粘土が堆積している。その下に遺構基盤層である黄灰色粘土があり、その上面で遺構確認調査を実施した。

13区　現代耕作土、現代床土の下層に、中近世包含層である淡灰黄色細砂質粘土が存在し、さらに下層に、地山である黄灰色礫まじり細砂が堆積する。遺構確認調査はこの上面において実施した。

14区　北部では現代耕作土および床土以下、中近世包含層である灰褐色粘質土を挟んで、遺構基盤層である黄灰～灰色粘土に至る。中央部においては、現代耕作土直下において遺構基盤層である淡灰黄色粘土となり、北部においては灰茶色土の遺物包含層を挟んで淡黄褐色粘土の遺構基盤層となる。

15区　層序は一定せず、現代耕土直下で地山層となる部分、幾度かの水田の造成による整地層が見られる所や、谷筋への深い流土が堆積し、地山の確認されなかった部分などがある。

（1）1区

遺構

底辺約31m、高さ約23mの二等辺三角形の調査区である。遺物包含層を除去した地山面で耕作痕と思われる浅い溝が5条と、圃場の段が検出された。溝と段の方向はほぼ東西方向を示し、現在の圃場における区画および耕作方向に一致する。

遺物

出土遺物はほとんどが小片であり、中世から近世のものが出土している。5は近世以降の圃場段埋土出土の銅銭で、法量は銭径23㎜、内径18㎜、銭厚1.3㎜、残存量目1.4ｇを測る。腐食が激しいため、銭文は左の「寳」以外は判読できない。

（2）2区

遺構

幅約3.5m、長さ約42mの調査区である。調査の結果、1区と同様の溝および圃場段を検出した。また、調査区西端では近世の埋め甕を検出した。これは、北接する現家屋に関係のあるものと考えられる。

遺物

中世から近世の遺物が少量出土している。9は近世耕作土出土の長径1.8cm、短径1.4cmの鉄滓系遺物で、重量は3.9ｇを測る。

（3）3区

遺構

排水路予定地に設定した幅3ｍ、長さ105mの調査区である。本調査区も、1・2区同様、中世以降の耕作溝、圃場段のみが検出された。各圃場段は、人頭大の礫を積んだ石垣で壁面を保護している。

遺物

中世以降の耕作土である淡灰色シルト質極細砂からは、中近世の土器・陶磁器類および縄紋時代のものと考えられる石鏃、また鉄釘・銅銭などの金属製品が出土した。

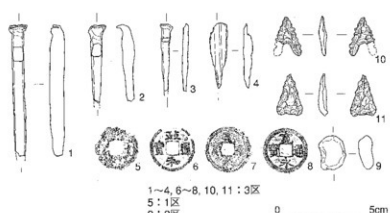


fig. 5　1・2・3区出土遺物

石　鏃

10、11はサヌカイト製の石鏃で、10は長さ21㎜、残存幅19㎜、最大厚４㎜、重さ0.6ｇ、比重２を測るもので、鍬形鏃に近い形状の凹基無茎鏃である。11は長さ22㎜、幅14㎜、最大厚4.5㎜、重さ1.1ｇ、比重2.75を測り、二等辺三角形を呈する平基無茎鏃である。

鉄製品

１～４は鉄釘で、折損してはいるが全て頭巻釘と見られる。１は残存長７㎝、横断面が８×６㎜の長方形を呈する。残存重量は10.5ｇである。頭部は端部を薄く打ち延ばしてあり、材に打ち込んだ際に端部が折れ曲がり、基部に接している。この時に基部もつぶれ、やや折れ曲がっているようである。２は残存長4.1㎝、横断面が７×７㎜で、正方形を呈する。残存重量は4.5ｇである。打ち延ばされた端部は打ち込まれた際に折れ曲がっているが、基部に接する程ではなく、また基部自体も打撃によってやや湾曲する。３は頭端部を欠損するが、残存する部位から頭巻釘と判る。残存長3.6㎝、横断面が５×４㎜の長方形を呈する。残存重量は0.9ｇである。４は鍛造鉄製品で、長さ3.4㎝、幅９㎜、重量1.9ｇを測る。釘の先端状の部位とやや平坦な部位が複合するものであるが、用途は不明である。

銅製品

５～８は銅銭である。６は政和通寶（初鋳1111年）である。銭径2.5㎝、内径２㎝、厚さ1.1㎜、重量2.1ｇを測る。７・８は寛永通寶である。７は銭径2.5㎝、内径２㎝、厚さ1.1㎜、重量2.1ｇを測る。８は銭径2.4㎝、内径1.9㎝、厚さ1.1㎜、重量2.5ｇを測る。

fig. 6　６区・７区北半部遺構平面図

（4）6区

遺構

南北が12m、東西が約18mの調査区である。地山である黄褐色礫まじり粘土上面で遺構確認調査を行った結果、掘立柱建物１棟、用途不明土坑２基、落ち込み、ピット群が検出された。

SB01

東西３間（8.0m）×南北２間（5.4m）以上の総柱の掘立柱建物であり、主軸をW15°Nに取る。基盤層が削平を受けているためか、柱穴の残りは悪く、検出できなかった柱穴もあった。遺構に伴う遺物は、柱穴出土の土師器・須恵器の小片のみで、13～14世紀に位置づけられる。

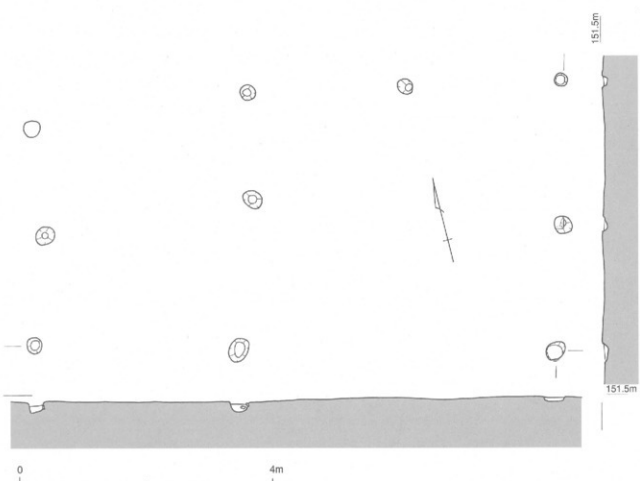


fig. 7　SB01平面・断面図

（5）7区

遺構

水路予定地の幅３mで長さが約55mの、南北に長い調査区である。黄褐色礫交じり粘土（地山）及び明灰黄色シルト（地山）の上面で遺構確認調査を行った結果、掘立柱建物１棟、ピット群の他、江戸時代の溜め井１基を検出した。

SB02　東西１間（1.7m）以上×南北２間（4.1m）以上の掘立柱建物であり、主軸方向をN25°Eに取る。柱穴内出土の土師器・須恵器の型式より、13～14世紀に位置づけられる。

SK01　直径約2.6 m、検出面よりの深さ約83cmを測る、円形の素掘りの土坑で、恐らく溜め井と思われる。埋土は上層の暗褐灰色粘土質極細砂と下層の暗灰色シルトである。埋土全体に拳～人頭大の角礫が多く、廃絶時に周辺の不要の礫が廃棄されたものであろう。出土遺物には江戸期の丹波焼甕胴部片がある。

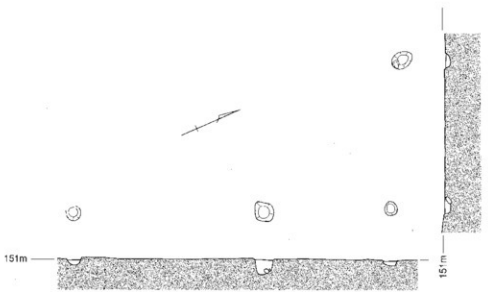


fig. 8
SB02平面・断面図

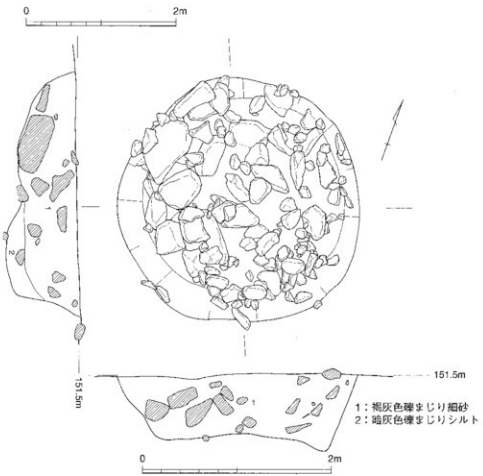


fig. 9
SK01平面・断面図

fig. 10　9区遺構平面図

（6）8区

幅3m、長さ約50mの調査区である。地山である明灰黄色シルト上面で遺構確認調査を実施した結果、7区との境界に近い部分で、木杭と石垣で護岸を施した近世の圃場段および水路を検出した。また、鎌倉時代の溝が1条検出されている。

（7）9区

9区は遺跡の位置する河岸段丘のほぼ西端付近にあたり、北は段丘崖に面している。現代耕作土及び盛土を除去した後、中世の包含層である褐灰色シルト質細砂上面で遺構精査を行ったが遺構は未確認であった。そこで下層の黄褐色礫交じり粘土（地山）、黄褐色粘土（地山）上面で遺構確認調査を行った。結果、鎌倉時代～室町時代にかけての遺構を検出した。検出遺構は、掘立柱建物3棟、溝4条、ピット群、土坑7基、墓坑1基、園池状遺構と付帯施設2箇所等である。

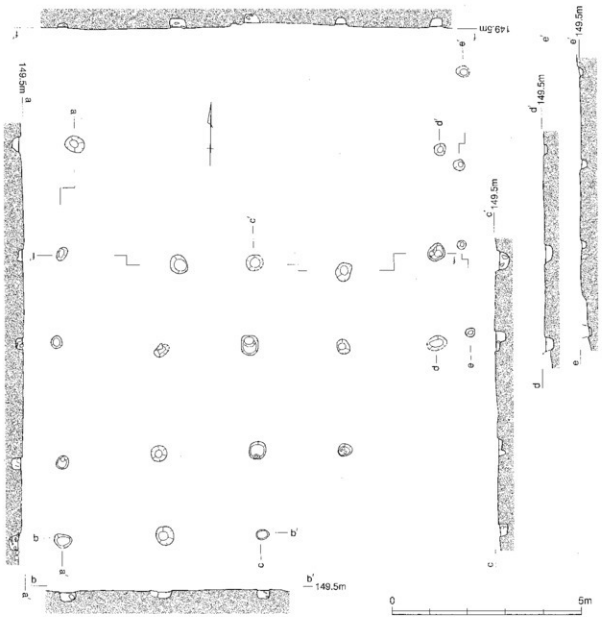


fig. 11　SB03平面・断面図

掘立柱建物

SB03　SB03は現在のところ当遺跡で最大の建物である。東西4間（10m）×南北4間（10.5m）で、東面に庇を持つ総柱の掘立柱建物であり、床面積は約105㎡を測る。主軸はN2°Wに取る。柱間は東西が2.3～2.6m、南北は2.2～2.7mを測り、庇の柱間は2.2～2.4mを測る。柱穴内の出土遺物より、13～14世紀に位置づけられる。

SB04　東西2間（4.2～4.3m）×南北3間（5.8～6.1m）の総柱の掘立柱建物であり、建物の主軸はN2°Wに取る。柱間は東西が1.9～2.1m、南北が2.0～2.1mを測る。柱穴内の出土遺物より、13～14世紀に位置づけられる。

SB05　調査区北端の、段丘崖に面した建物であり、主軸はN62°Eに取る。崖面に平行して3列の柱列が検出されている。梁方向の柱列が崖面にほぼ平行にずれており、地滑りなど何らかの理由で平行にずれたものと推測されるが、土層断面等の観察においては検証は得られていない。柱間はそれぞれ北・中間列が5間、南列が3間分検出されている。出土遺物は僅少ではあるが、中世に属する建物と考えられる。

掘立柱建物に伴う遺物

掘立柱建物に伴う遺物としては柱穴埋土よりのものがあるが、いずれも小片であると共に出土量も僅少であり、図化できたものは4個体のみである。中には40のような平安時代

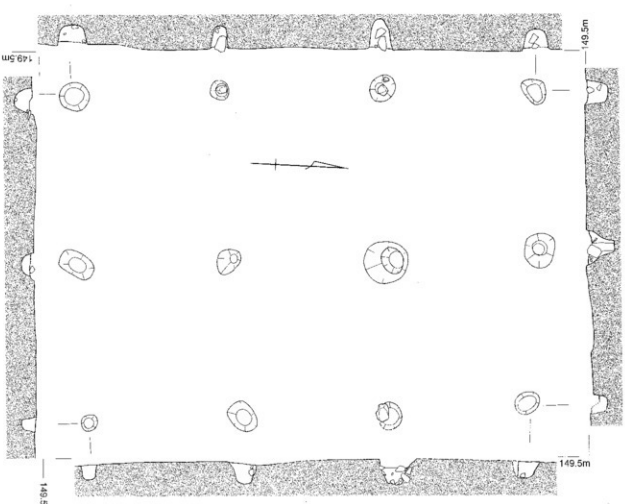


fig. 12　SB04平面・断面図

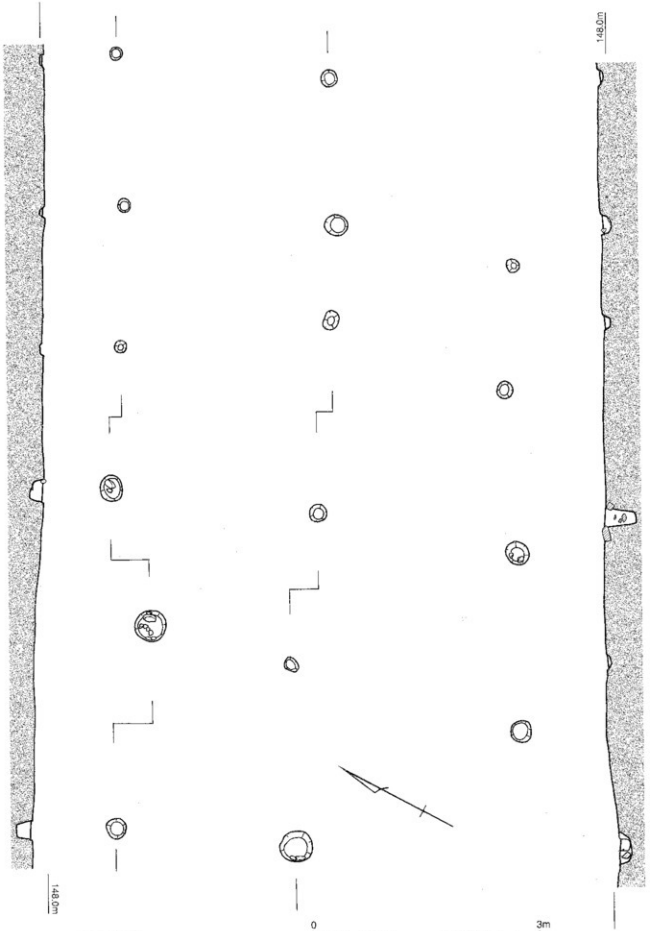


fig. 13　SB05平面・断面図

に遡る遺物も存在するが、その殆どが12世紀後半～13世紀代のものである。13はSB03、12・14・15はSB04の柱穴埋土より出土した。

須恵器

12（SB04－P2出土）は須恵器片口鉢で、復元口径29cm、残存高3cmである。口縁端部をつまみ上げて口縁外面が垂直に近くなっている。内面は凹線は殆ど残らず、やや凹む程度である。13世紀前半頃のものと考えられる。13（SB03－P5出土）は須恵器小鉢で、復元口径20cm、残存高2.6cmである。口縁端部外面を断面三角形に肥厚させて、外面を垂直に仕上げている。12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる遺物である。14（SB04－P6出土）は須恵器壺で、復元口径16cm、器高5cm、底径6.5cmである。底部は回転糸切り底で、器壁は底部から口縁部まで、ほとんど稜を持たずにほぼ直線的に開く形態である。12世紀末～13世紀初頭のものである。15（SB04－P9出土）は須恵器坏の底部で、貼り付けの輪高台を持つ。復元底径は11cmで、高台の高さは約1cmである。この須恵器坏は、今回調査で唯一の平安時代に属する遺物である。本例は周囲の土壌に混入していたものが入ったと考えられるが、西側に隣接する荻原城遺跡の平成9年度第7次調査でも、旧河道の河原より平安時代後期に属するほぼ完形の土師器坏が出土しており、周辺に居住域の存在した可能性がある。

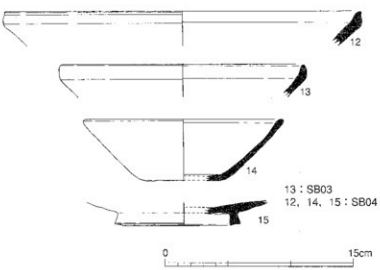


fig. 14　SB03・04出土土器

土坑

SB03・04の内部では、埋土に焼土ブロックのまじる平面長方形の土坑が3基検出されている。周辺地区の包含層などからも、鉄器生産に関わると見られる遺物が出土しており、土坑群も何らかの関連が推測される。

SK02

長径115cm、幅85cm、検出面からの深さ約30cmを測る長方形の土坑短辺に、長径60cm、幅50cm、検出面からの深さ約8cmの歪な三角形の土坑が付属するものである。坑底中央には、直径約50cmのピットが穿たれている。埋土は小土坑に焼土ブロックまじりの赤褐色細砂が、大土坑には下層に黒茶褐色細砂、上層には褐色細砂まじりシルトが堆積する。火の使用が推定される遺構である。出土遺物より13世紀代の遺構であると考えられる。

SK03

長径110cm、短径65cm、検出面からの深さ8cmの歪な長方形を呈する土坑である。埋土は赤褐色細砂まじり粘土で、熱を受けて焼けた状況が見られ、周辺において何らかの火を使用が行われていたことが推測される。SK03そのものの坑底には焼けた様子は見られなかった。出土した遺物より、鎌倉時代～室町時代のものと考えられる。

SK04

長径105cm、短径60cmを測る長方形の土坑である。検出面よりの深さ10cm以内の浅い部分と、深さ40cm程度の深い部分がある。また南東隅には直径20cm内外の突出部を持ち、内部には直径20～30cmのピットが3基存在する。出土遺物より13世紀代の遺構と考えられる。

土坑出土の遺物

白　磁

土師器

土製円盤

図示できた土坑出土の遺物は3点のみである。16はSK02出土の華南産白磁碗で、復元口径は18cm、残存高は2cmを測る。口縁部は外側に折り返され、玉縁状になる。生産時期は11世紀後半～12世紀初頭である。17はSK02出土の土師器椀の底部片である。復元底径6cm、残存高1.5cmを測る。底部は回転糸切り底である。13世紀代に位置付けられる。18は土製円盤で、SK04より出土した。手づくねで成形されており、直径3cm、厚さ1.5cmを測る。円盤面は表、裏共に中央部を押厚し、ちょうど赤血球を肥厚させたような形状を呈する。側面は円周に沿って平らに仕上げており、何らかの平坦面上を転がして成形したように見受けられる。時期は不明であるが、伴出する土器片には13世紀代のものがある。

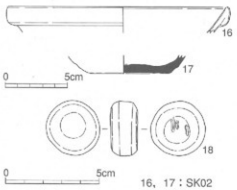


fig. 15　SK02・04出土遺物

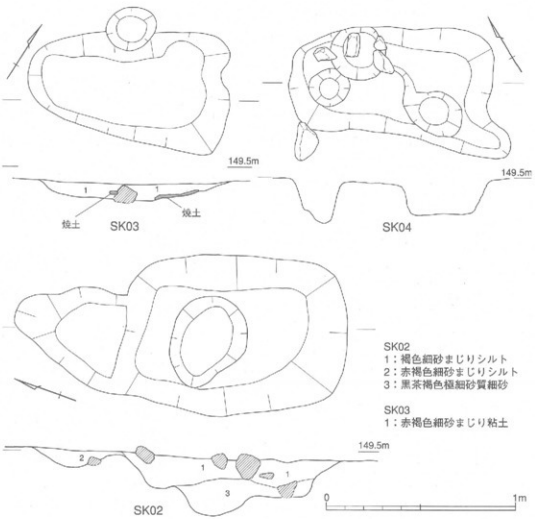


fig. 16　SK02・03・04平面・断面図

ピット群

9区では中世、近世のものを合わせ、約150基のピット群が検出されている。

ピット出土の遺物

須恵器　19～25は東播系須恵器塊である。19（SP130 出土）は復元口径16cmを測る。鎌倉時代の遺物である。20（SP151 出土）は復元口径16cmを測る。13世紀前半の遺物である。21～23はSP209 より出土したものである。21は復元口径15cmを測る。鎌倉時代の遺物である。22は復元口径16cmで、13世紀代のものである。23は復元口径14cm、底部径6cm、器高3.7cmを測る。底部は回転糸切りである。12世紀末～13世紀初頭に属する。24（SP238 出土）は復元口径14.5cm、底部径約6cm、器高3.5cmを測る。底部は回転糸切りである。内面器壁に墨書が1文字認められるが、判読はできない。12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。25（SP130 出土）は復元口径16cm、底部径8cm、器高4.2cmを測る。底部は回転糸切りである。また内面には黒褐色～淡茶褐色に変色する部位が存在し、黒色の炭化物も付着する。これは灯明皿としての利用が推測される。12世紀後半の遺物である。26は須恵器鉢で、SP234出土であり、復元口径は19cm、残存高は4cmである。口縁部は外側へ水平に引き出され、端部は水平な面をつくる。内外面共にロクロ調整の痕跡が稜線として残る。28はSP170 出土の須恵器甕の胴部片である。胎土は極細砂質でやや荒く、焼成も不良で、手で触れると砂粒が剥落する。外面には12条／4cmの綾杉状の叩き目が施される。内面の当て具痕は不明瞭である。鎌倉時代に属すると考えられる。

土師器　27はSP209 出土の土師器塊である。復元口径は20cmを測る。やや外反しながら僅かに外傾する頸部を持ち、胴部は偏平な球形になるものである。胴部外面の平行叩きは7条／2cmであり、内面当て具痕の径は4cm前後である。13世紀後半～14世紀に属する。

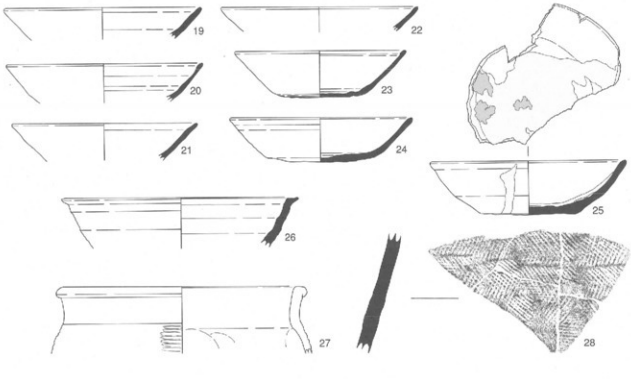


fig. 17　9区SP出土土器

砥　石

29はSP211 出土の粘板岩製の砥石で、定角の長方形を呈する。幅3.9㎝、残存長9.5㎝、厚さ1～2㎝、重量89.6ｇ、比重は2.38である。両面共に使用痕があり、全長の中央付近が最も磨耗している。石材の表面の精良さからは、仕上げ砥石としての使用が推定される。

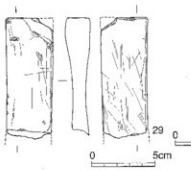


fig. 18　9区ＳＰ出土遺物

金属製品

30は鉄釘で、SP151 より出土した。残存長2.5㎝、横断面が5×4.5㎜の正方形で、残存重量は0.8ｇである。頭端部を薄く打ち延ばし、基部側に端部を折り曲げてる頭巻型と思われるが、端部形状は欠損のため不詳である。また基部は打ち込み時に先端の方が湾曲している。31はSP211 出土の銅銭で、銭文は左の「寶」のみ残存する。銭厚1.3㎜を測る。

墓址

ST01

調査区南西隅で検出された土葬墓で、東西方向の浅い溝を切って掘り込まれている。長径155 ㎝、幅70㎝、検出面よりの深さ20㎝を測る、楕円に近い長方形を呈する。主軸方向はN92° Ｅで、遺存していた脛骨か腓骨と考えられる長骨の位置から、頭位は東向きであったと推定される。供献品には、龍泉窯系青磁碗、鉄刀、火打金がある。青磁碗は口縁部を北に向けて横転しており原位置から移動しているが、頭部付近に供献されていたものと思われる。刀子及び火打金は、墓坑のほぼ中央、南側に供献されていたが、坑底より約7㎝程浮いた状態で出土した。埋土は灰褐色細砂まじり極細砂１層であり、当初は土坑墓で

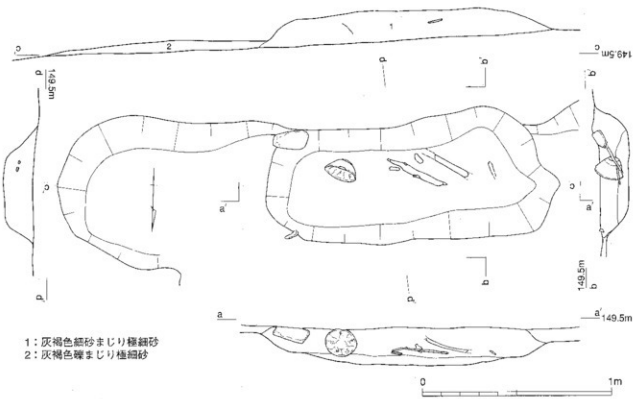


fig. 19　ST01平面・断面・立面図

あると推定されたものの、遺物の埋蔵状況からは、木棺上に置かれた品物が棺体が腐朽したために棺内に転落、埋没したとも考えられるため、ＳＴ01が木棺墓であった可能性も否定できない。また、近接する行原遺跡からも13世紀代の火葬土坑が検出されており、当地域における葬制の遷移状況について比較検討を行う余地がある。

ＳＴ01出土の遺物

青磁碗　ＳＴ01からは青磁碗１点、刀子１振、火打金１個、その他中世の須恵器・土師器の小片が出土した。32は浙江省龍泉窯系青磁碗の完形品である。口径は16.5cm、底部径5.5cm、器高7.1cmである。底部は削り出し高台で、高台外面から見込み部にかけて、透明感のあるオリーブ色の釉がかかる。内面にはヘラ描きで飛雲文とＳ字文が５単位めぐり、口唇部直下には口縁に平行する２条の直線を引く。12世紀代の遺物である。

金属製品　33は完形の鉄製刀子であり、刀身の全長は31.5cmを測る。切先から区までの長さは23.9cm、茎長は7.6cmである。茎尻から４cm、茎全幅の中央付近には径4.5mmの目釘孔が穿たれている。刀身の幅は区部付近で３cm、厚さは棟部で8.5mm、茎の幅は目釘孔付近で1.7cm、厚さは５mmを測る。切先は平造りである。また木製の鞘の痕跡が、錆に置き代わった状態で残存していた。木取りは、棟部に柾目方向の組織が観察できる。34はほぼ完形の鍛鉄製火打金である。いわゆる「山形」火打金と呼称されるもので、山田氏の分類ではｃ類に分類される。打撃部幅7.6cm、高さ2.8cm、握り部厚3.0mm、打撃部厚3.5～4.0mmを測る。重量は10.25ｇである。平面形は平らな二等辺三角形を呈し、三角形の両底角が上方に反り上がり、打撃部がやや弧を描く。握り部の中央には直径４mmの穿孔が施されており、緒等を通したものと思われる。打撃部の中央付近には使用による抉れが見られる。

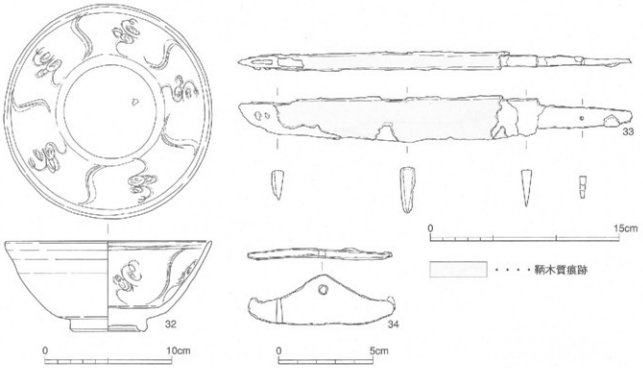


fig. 20　ＳＴ01出土遺物

園池状遺構

木津遺跡の位置する中位河岸段丘は巨視的に見ると南が高く、北へ向かって下がっている。しかし９区の南端付近では、調査区の西側に北流する小規模な谷が存在し、その影響から、園池状遺構の検出された場所の周囲においては東が高く、西側の谷へと緩やかに下がる地形となっている。

園池状遺構はSX02・05を中心としたものと、SX03・SD04で構成されたものの２箇所が検出された。池状の堀り込みは、地山（黄褐色礫交じり粘土）を掘削した後に護岸石組みを施しており、池の底面に露出している礫は、地山中に含まれているものである。護岸石組みの基底石は、堀り形を持たず、地山面に直接据えられている。これは池自体の規模が小さいため、それ程大がかりな施設を要しなかったためと考えられる。また園池の周辺には拳大前後の礫が入るピットが点在しているが、これは園池周辺の景観を構成する、景石の堀り形である事、またピット内に置かれた礫が、景石を支えるかませ石であること等が推測される。

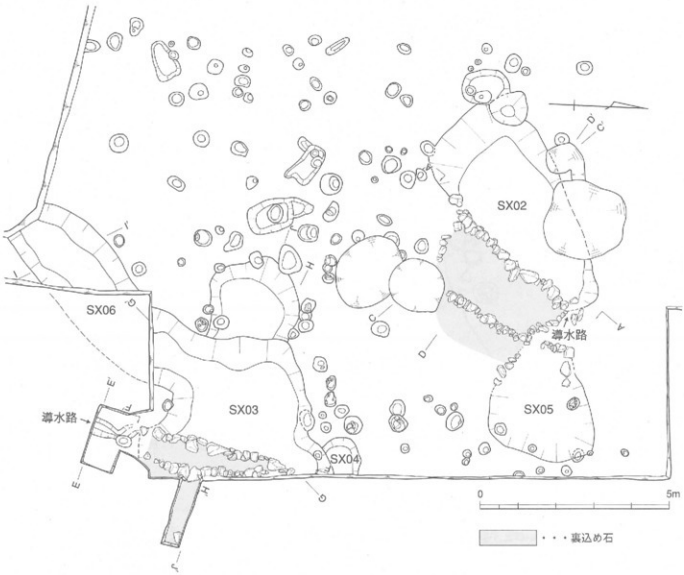


fig. 21　園池状遺構平面図

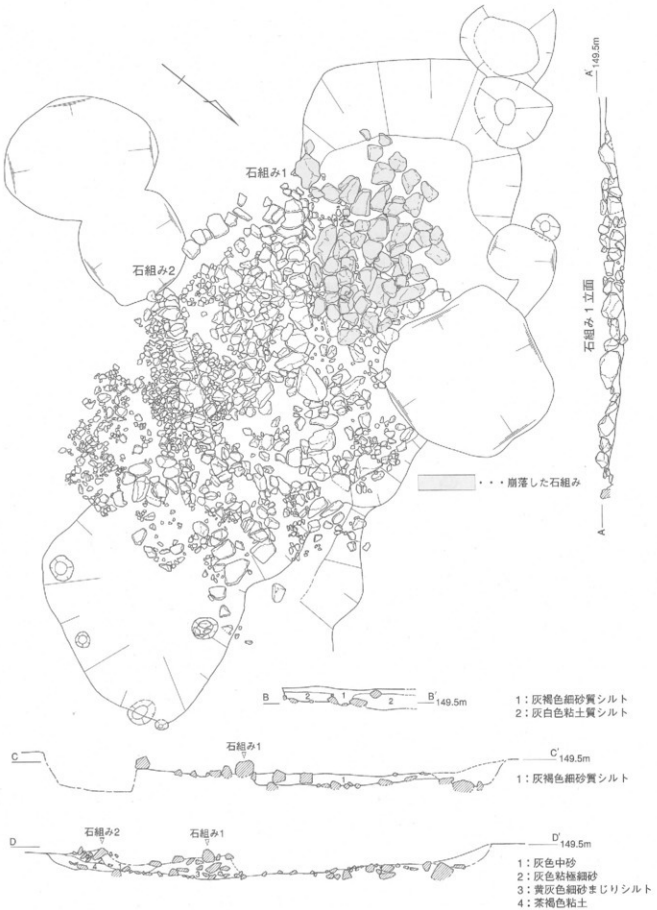


fig. 22　SX02・05平面・断面・立面図

SX02・05

SX02　SX02は長径約6.0m、短径約4.5m、深さ50cmの堀り込みであり、楕円に近い長方形を呈し、長径方向が北東－南西を向いている。対角線上及び南東側に2列の護岸石組みを持つ。石組みはそれぞれ直径約20～70cmの川原石を積んで形成されているが、検出されたのは基底の1段ないし2段のみであり、更に上は残存していなかった。石組み1の北西側には同程度の石が落ち込んでおり、石組みの石が何らかの理由によって転落したか、廃絶時に投棄されたものと考えられる。また、石組みはそれぞれ北西向きに石の平坦面を向けて積まれている事や、南東側を巨大の礫によって裏込めされている事等から、堀り込みの底面が露出している北西側を意識して形成されていると考えられる。出土遺物より、13世紀初頭に開削され、14世紀代に廃絶したと考えられる。

SX05　SX05は直径約3m、検出面からの深さ10cmの堀り込みである。非常に残りが悪く、浅い皿型を呈する。石組みは西側に若干残存していた。SX02よりもやや高い位置にあるため、池水が存在していたと考えると、SX05からSX02へ導水していた可能性が考えられる。ただし、洪水及び後世の削平のため、SX05への導水方法は不明である。出土遺物より、14世紀代に廃絶したと考えられる。

SX02出土の遺物

須恵器　遺物はSX02出土のものを図示している。35～37は片口鉢である。35は裏込め出土で、復元口径28cmを測る。口縁部を肥厚させ、口唇部外面は垂直に近い面を形成する。13世紀前半のものである。36は埋土出土で復元口径24cmを測る。口縁端部を極度に肥厚させ、玉縁状の口唇部を形成し、その直下には内外面にロクロナデによる凹線が入る。14世紀代の

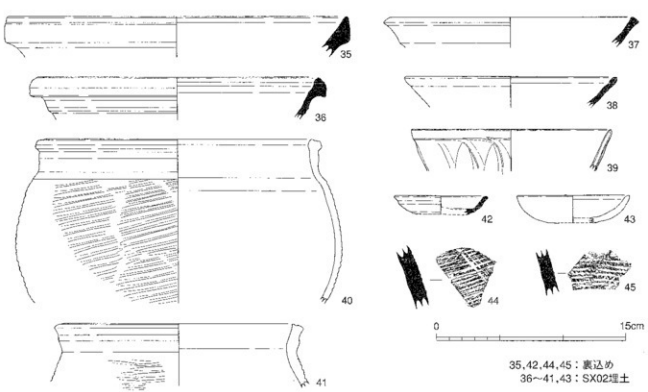


fig. 23　SX02出土遺物

遺物である。37は埋土出土で復元口径20.5cmを測る。口縁端部は肥厚させず、器壁に対して直角の面を形成する。本遺構出土の遺物では古相を呈し、11世紀末～12世紀初頭に位置づけられる。38は埋土出土の塊で、復元口径17cmを測る。直線的な器壁を持つタイプで、13世紀代に位置づけられる。42は盛土出土の小皿である。復元口径7.5cm、器高1.5cmを測る。ロクロナデ成形の器壁と回転糸切り底を持つ。13～14世紀の遺物である。44・45は瓮胴部片である。器外面には、44は10条／3cm、45は9条／3cmの平行叩き目を方向を違え、格子状に調整痕を残す。器厚は44が1.2cm、45が0.9cmである。

土師器

40・41は堝である。40は復元口径23cm、胴部最大径26.2cm、残存高13cmを測る。口縁端部を肥厚させてほぼ垂直に立ち上がる口頸部に、胴部中央付近に最大径の来る偏平な球形の胴部を持つ。胴部外面は、13条／5cmの平行叩き目が残る。内面は使用による磨耗が著しく、当て具痕などは観察できない。13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。41は復元口径20cmを測る。直線的に外傾する口頸部に、偏平な球形の胴部が付くもので、胴部外面には7条／2cmの平行叩き目が残る。13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。43は小皿である。復元口径は9cm、器高2.2cmを測る。鎌倉時代の遺物である。

青　磁

39は龍泉窯系蓮弁文青磁碗で、器外面に輪約2.5cmの単蓮弁文が片彫りで描かれている。復元口径は16cm、残存高は3.2cmである。13世紀前半のものである。

金属製品

46～51は鍛鉄製釘である。46～48は埋土出土であり、49～51は盛土に包含されていた。46は頭巻釘で、残存長5.1cm、横断面が6.5×7mmのほぼ正方形を呈する。残存重量は3.9gである。47は折り曲げ釘で、残存長3.7cm、横断面が8×6.5mmの長方形を呈する。残存重量は4.3gである。48は端部を欠損するものの頭巻釘と判別される。残存長3.4cm、横断面が4×5mmのほぼ正方形を呈する。残存重量は1.6gである。49は頭巻釘または折り曲げ釘と考えられるが端部が欠損しており、詳細は不明である。また打ち込み時に基部が湾曲してしまっている。残存長2.8cm、横断面が4×3.5mmの正方形を呈する。残存重量は1gである。50は基部先端部分のみ残存するため、頭部形状は不明である。残存長2cm、横断面は最太部で4×3mmの方形を呈する。残存重量は0.5gである。51は頭端部が欠損しており頭部形状は詳細が不明であるが、薄く打ち延ばした状況が見て取れる。残存長3.5cm、横断面は11×6.5mmの偏平な六角形を呈する。残存重量は6gである。52・53は用途不明の不定型の鉄製品で、鋳鉄製である。52は11.8g、53は13.9gを測る。

46～48,52,53：SX02埋土
49～51：裏込め

fig. 24　SX02出土鉄製品

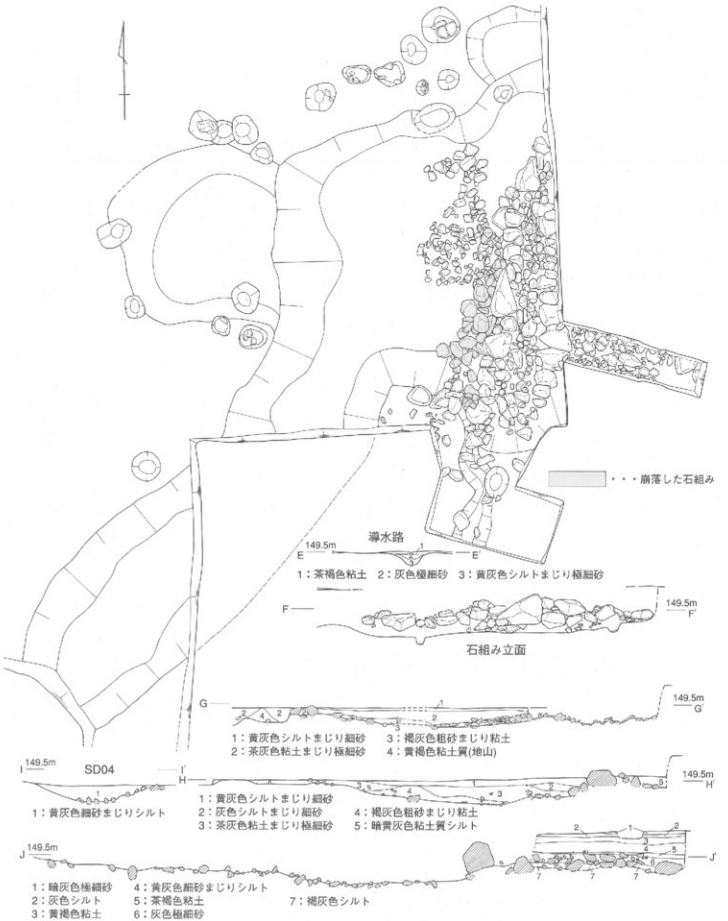


fig. 25　SX03・04・SD04平面・断面・立面図

SX03・04・SD04

SX03　東西８m以上、南北約４m、検出面からの深さ40cmの掘り込みである。ほぼ南北方向を向いた２列の護岸石組みを持つ。どちらの石組みもSX02の石組み１、２と同規模の川原石を１段ないし２段積んで形成している。こちらも上段は何らかの理由によって失っているようである。SX02と同様の理由より、西面を意識して形成されている。また西側には直径約2.5m、深さ約10cmの浅い部分があり、洲浜的なものであった可能性がある。またSX03の南にはSD08が取り付くが、これは検出レベルより、SX03に水を流し込む導水路の可能性が考えられる。出土遺物より、12世紀初頭に開削され、14世紀代に廃絶したと考えられる。

SX04　直径1.2m以上、検出面からの深さ約30cmの土坑で、SX03の北辺に接している。

SD04　幅約1.5m、検出面からの深さ約30cmの溝であり、SX03の南西角に取り付き、北東－南西を向いている。池が貯水していたとすれば、オーバーフローした水をSD04を通して西側の谷へ落としていたものと想像できる。出土遺物から、14世紀代に廃絶したと考えられる。

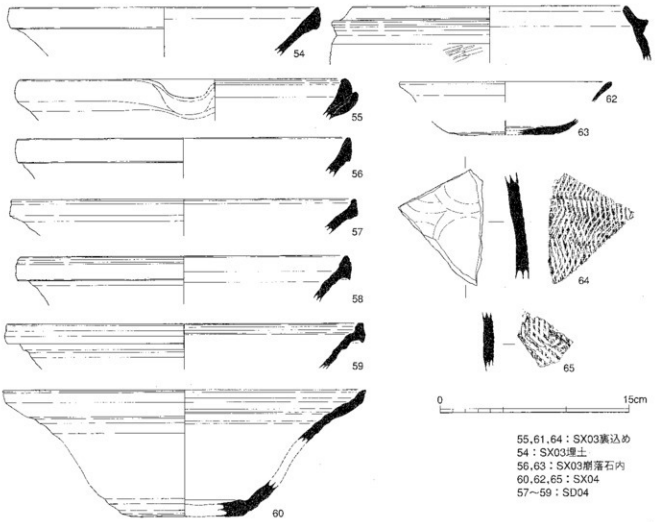


fig. 26　SX03・04・SD04出土土器

SX03・04・SD04出土の遺物

須恵器　遺物はSD04・SX03出土のものと、SX04出土のものを図示している。54～56はSX03出土の片口鉢である。54は復元口径25cmを測る。口縁端部を肥厚させ、端部外面がほぼ垂直になる。内面には凹線は残らない。13世紀前半の遺物である。55は口縁端部を肥厚させ、丸みを帯びた外面を形成する。また口縁の一端を指で引き出し、片口を作りだしている。13世紀前半の遺物である。56は口縁端部を肥厚させ、外面を垂直に成形したのち、下端を僅かに垂下させる。13世紀後半のものである。57～59はSD04出土の片口鉢である。57は復元口径28cmを測る。口縁端部を肥厚させ、口縁断面が三角形を呈する。内面にはロクロナデによる凹線が残る。12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。58は復元口径27cmを測る。口縁端部を肥厚させ、外面下端を垂下させる。13世紀後半のものである。59は復元口径29cmを測る。口縁部は上・下方に拡張される。14世紀前半に位置づけられる。63は埋土出土の塊底部片である。復元底径は8cmを測る。器壁はロクロナデ、底部は回転糸切り底である。13世紀後半に位置づけられる。64は石組み裏込め出土の瓷胴部片である。外面は9条／3cmの平行叩きを綾杉状に施す。内面は径5cm程の当て具痕が残っている。

60はSX04出土の須恵器片口鉢で、口縁部片と底部片が出土し、同一個体と考えられ、図上復元をしている。復元口径は29cm、復元高は10cmを測る。口縁端部は上方へ引き上げられ、端部外面を拡張する兆しが見える。12世紀末～13世紀初頭に属する。62はSX04出土の塊である。復元口径は17cmを測る。13世紀のものであろう。65はSX04出土の瓷胴部片で、外面に6条／2cmの平行叩きを綾杉状に施す。

土師器　土師器は61の土壙がある。復元口径は20cmで、口縁・胴部間に器面からの高さ約1cmの鍔がめぐる。14世紀後半に位置づけられ、当遺構では新相のものである。

包含層出土の遺物

鉄　釘　中世の遺物包含層である、褐灰色シルト質細砂からは、須恵器・土師器・青磁・白磁・砥石・鉄釘・炉壁・スラッグ等、鎌倉時代前半～室町時代前半に属する各種遺物が出土しているが、いずれの遺物も小片であり、図示可能なものは鉄釘3点である。66はほぼ完形の折り曲げ釘である。残存長6.9cm、横断面が6×5㎜のほぼ正方形を呈する。残存重量は4.9gである。67は頭部は端部を打ち延ばした状況が観察できず、直線的に断ち切った様子が見受けられる。68は折り曲げ釘である。ほぼ完形に近いが、先端部が欠損している。残存長4.8cm、横断面が6×5㎜のほぼ正方形を呈する。残存重量は4.7gである。

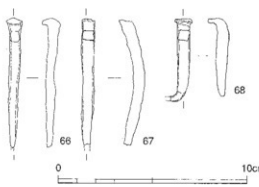


fig. 27　9区包含層出土鉄製品

（8）10区

10区は幅3m、長さ約60mの北区と、底辺11m、高さ20mの歪な二等辺三角形の南区に分かれる。北区は、地山である黄褐色礫まじり粘土上面で遺構確認調査を実施した結果、中世の遺構はピットが1基検出されたのみである。南区は、現代耕作土を除去すると鎌倉時代の遺物包含層（暗褐色礫まじり細砂）があり、この上面で江戸時代の遺構面が存在した。更に暗褐色礫まじり細砂を除去した後、地山である黄褐色礫まじり粘土上面で、鎌倉時代の遺構面を検出した。

10－南区 第1遺構面

出土遺物の年代より、江戸時代に位置づけられる。検出遺構は、炉跡1基、土坑1基、ピット3基、溝3条である。

鉄製品製造遺構

SK07

直径約95cm、深さ約23cmのほぼ円形を呈する土坑である。坑底には直径10cm～40cmの平らな礫が据えられており、北側の壁にも礫が貼られている。その上には5層の粘土が貼られ、中を皿状に成形している。更にその上にも粘土が貼られているが、表面が高熱によってガラス質に溶解している。鞴羽口の取り付け痕や燃料炭の残存はなかったが、鍛冶炉もしくは鋳造に伴う溶解炉であると推定される。

SK08

SK07の東約60cmに位置する土坑である。検出面での直径約90cm、坑底の直径約57cmを測る円形の土坑で、坑底から約25cm上に幅約8cmのテラスを持つ。テラスには径10～20cmの河原石を並べている。埋土は褐色細砂が堆積していた。検出された位置からも、SK07に関連のある遺構と考えられ、SK07が鉄製品の製造に関わる炉であるなら、樋や鞴等を設置し、水溜め等に使用していた可能性もあろう。遺物は出土していないが、周辺の状況から江戸時代の遺構と考えられる。

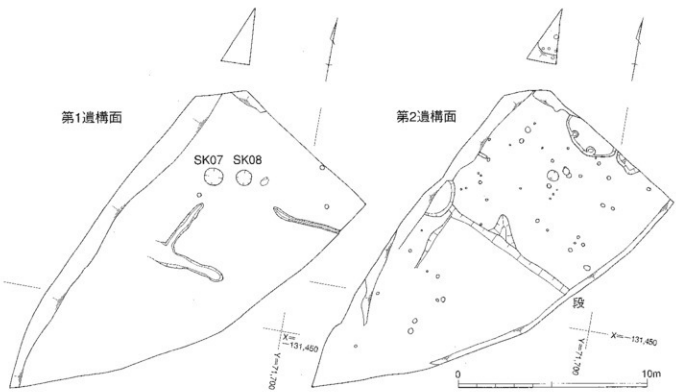


fig. 28　10－南区遺構平面図

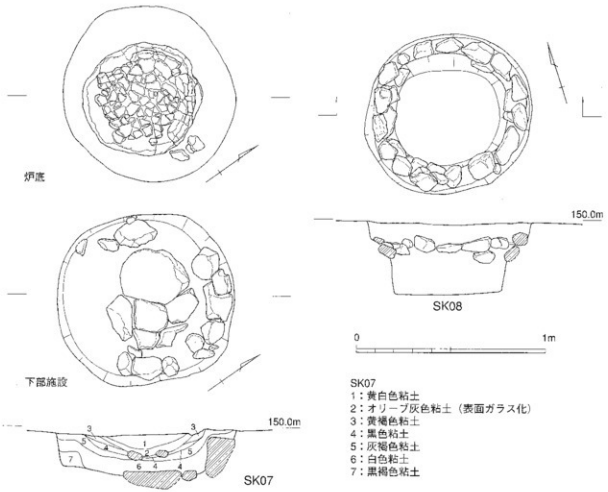


fig. 29　SK07・08平面・断面・立面図

第2遺構面　出土土器の年代により、13～14世紀に位置づけられる。検出遺構はピット群、落ち込み3、段等である。段は高低差が5～20cmあり、耕作、もしくは宅地造成のため、平坦地を形成する目的により、切土が行われたものと考えられる。下段上面には中世遺物包含層である暗褐色礫まじり細砂、黒褐色礫まじり細砂が堆積していた。

遺物

中世の出土遺物には須恵器・土師器・青磁・金属製品・鋳型・炉壁・鉱滓等がある、殆どが遺構面上に堆積していた2層の包含層出土のものである。

須恵器　69～71は下段埋土より出土の須恵器塊である。69は復元口径17cmを測る。口縁付近で若干内湾しており、ロクロナデによって器内外面が調整される。12世紀末～13世紀に位置づけられる。70は復元口径17cmを測り、ロクロナデされるが、外面に調整時の稜が水平に、明瞭に残る。12世紀末～13世紀に属するものである。71は復元口径17cmを測る。器内外はロクロナデされ、なめらかに器面調整されている。口縁端部を僅かに肥厚させる。12世紀末～13世紀に属するものである。72は下段埋土出土の復元口径29.5cmを測る片口鉢で、口縁端外面の肥厚が若干見られるようになる段階のもののようである。口縁部内面にはロクロ調整時のユビナデ痕が僅かに残される。12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。

土師器

76・77は土師器羽釜である。76は段埋土出土で、復元口径24cmを測る。幅約1.2cm、最厚部の厚さ1.2cmの鍔が口縁下部にめぐる。鍔は貼り付けられており、鍔直下には圧着時のユビオサエ痕が残る。77も下段埋土出土の羽釜である。復元口径は27.5cmで、口縁下部の外面には幅約2.2cm、最厚部の厚さ約1cmの鍔がめぐる。器外面はヨコナデされ、内面は幅1.8cm内外のハケメ調整の痕跡が観察できる。以上の2点は12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる。78は段埋土出土の土壙である。復元口径は26cmである。やや外反する口頸部と、おそらく偏平な球形を呈するであろう胴部が、頸部で「く」の字に接合する。口頸部はヨコナデされるが、胴部外面には16条／5cmの平行叩きが施され、内面には直径2～3cmの当て具痕が観察できる。

青　磁

73は下段埋土出土の青磁碗で、現在の中国福建省、同安窯系の製品である。復元口径17cmを測る。器外面にヘラ工具による印刻文が施される。口縁直下に水平直線が1条と、やや斜行する3条の印刻線が観察できる。12世紀後半のものである。74は下段埋土出土の蓮弁文青磁碗で、現在の中国浙江省、龍泉窯系の製品である。復元口径17cm、残存高4.5cmを測る。器外面に1単位約3cm幅の片彫り蓮弁文が施される。13世紀前半～中頃の遺物である。75は包含層出土の龍泉窯系蓮弁文青磁碗で、復元口径16cmを測る。器外面に1単位約2.2cm幅の片彫り蓮弁文が施される。13世紀前半～中頃の遺物である。

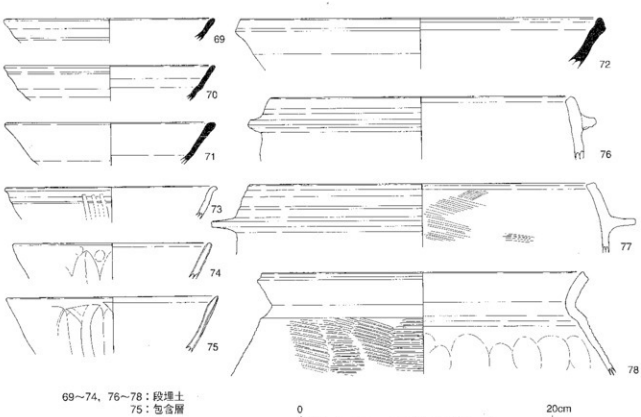


fig. 30　10－南区出土遺物

鉄製品

鉄製品は下段埋上、中世遺物包含層の暗褐色礫まじり細砂および黒褐色礫まじり細砂より、板状製品・鉄釘・刀子片等が11点出土している。後述するが、鋳型・炉壁・鉱滓といった鋳造関連遺物も伴出しており、出土鉄製品の中には当地で製造されたものも存在する可能性がある。

79は黒褐色礫まじり細砂出土の板状鋳鉄製品で、長径６cm、短径2.8cm、厚さ約５mm、残存重量19.1ｇを測る。中央付近で弧状に湾曲する稜を持ち、その形状からは、鉄鍋の残欠である可能性もある。鉄鍋の底部破片であれば、その復元底径は約20cmである。80も黒褐色礫まじり細砂出土の板状鋳鉄製品で、ほぼ平坦な板状を呈する。長径5.1cm、短径3.4cm、厚さ４mm、重量13.8ｇを測る破片で、端部を持たないため、本来の形状は復元し難い。81は完形の鍛鉄製頭巻釘で、長さ6.1cm、横断面が４×４mmの正方形を呈する。重量は3.4ｇである。82は頭巻釘で、残存長3.5cm、横断面が６×5.5mmの正方形を呈する。残存重量は3.9ｇである。83は基部に対して斜め一文字に頭部を仕上げている。84・85は暗褐色礫まじり細砂出土で、断面が薄いくさび形を呈する板状鉄片で、刀子片と考えられる。84は幅1.9cm、棟側と考えられる部位で厚さ約５mm、刃側に向かって薄くなる。残存重量は2.1ｇを測る。85は幅1.8cm、棟側の厚さ４mmで、刃側で薄くなる。残存重量は2.3ｇを測る。86は黒褐色礫まじり細砂出土である。内部の腐食による錆化が著しく、本来の形状は不明であるが、錆膨れした外形は山形の火打金に似る。片側の底角部を欠損するが復元すると偏平な二等辺三角形で、両底角が反り上がる形状が想像される。打撃部の残存幅5.3cm、復元幅6.5cm、最大高2.5cm、最大厚９mm、残存重量11.4ｇを測る。87は暗褐色礫まじり細砂出土の長楕円形の板状製品の一端である。残存長5.2cm、厚さ３mm、残存重量8.5ｇを測る。あるいは山形火打金の残欠の可能性も考えられるが、確証は得られていない。88は鍛造鉄製品の残欠と考えられる。残存長2.7mm、厚さ11mm、残存重量10.5ｇを測る。腐食により４層に剥離している様子が観察され、１層が厚さ約３mmである。89・90は塊状鉄製品で、本来の形状は不詳である。89は下段埋土出土、長径2.2cm、残存重量２ｇ、90は黒褐色礫まじり細砂出土、長径2.3cm、残存重量3.8ｇを測る。

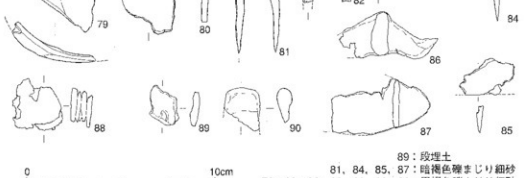


fig. 31　10－南区出土鉄製品

（9）11区

西辺23m、東辺16m、東西20mほどの矩形の調査区であり、東から西へむかって緩く傾斜している。

調査区東部においては、耕土直下の黄灰色粘土上面で、中央部から西部にかけては、中近世の遺物包含層である灰黄色土、暗灰色土を挟んだ下層の、黄灰色粘土、黄茶色土上面で遺構確認調査を実施した。

中世以前の遺物

11区では鎌倉時代～室町時代の遺構が検出されているが、それ以前の遺構の存在は未確認である。しかし、中世の遺物包含層や中近世の耕作土層、現代の耕作土層からは縄紋時代～弥生時代の石器が出土している。これはとりもなおさず、周辺に当該時期の人間の生活があった証明であり、何処かに集落その他の存在が想像されよう。

石　器

11区では8点のサヌカイト製石鏃および石匙様の、つまみ部を持つ石器が出土している。以下に計測表を掲載する。

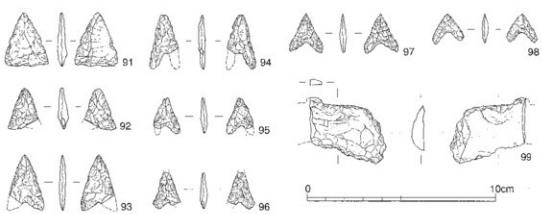


fig. 32　11区出土石器

	種類	形状	全長	全幅	厚さ	重量	比重	石　材	出土層位
91	石鏃	平基無茎	29	23	5	2.4	2.67	サヌカイト	黄灰色粘質土
92	石鏃	凹基無茎	22	16～	6	1.1	2.75	サヌカイト	黄灰色粘質土
93	石鏃	凹基無茎	30	19～	3	1.3	2.60	サヌカイト	ＳＤ０２東半
94	石鏃	長脚	29	15～	4	1.0	2.50	サヌカイト	灰黄色土
95	石鏃	凹基無茎	19	14	3	0.5	2.50	サヌカイト	黄灰色粘質土
96	石鏃	凹基無茎	19～	14～	4	0.7	2.54	サヌカイト	南辺撹乱
97	石鏃	凹基無茎	21	18	4	0.8	2.67	サヌカイト	灰黄色土
98	石鏃	鍬形	16	17	3	0.4	2.53	サヌカイト	ＳＸ０１
99	石匙		41～	36	6	11.0	2.56	サヌカイト	灰黄色土

表１．11区出土石器計測表　　（単位は　長さ＝mm、重さ＝g）

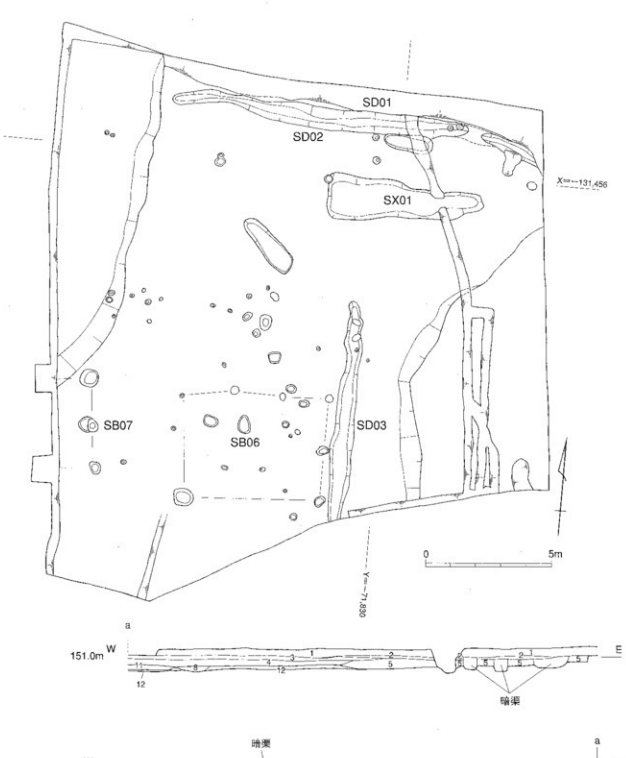


fig. 33　11区遺構平面・南壁土層断面図

遺構

遺構面全体が後世の圃場ないし宅地の造成目的のために削平を受けており、遺構の残存状況は良好とは言えないものの、建物２棟をはじめ、土坑３基、溝３条とまとまらないピット10数基を検出した。

SB06　調査区の中央部において検出された、南北２×東西３間以上の掘立柱建物であり、検出された柱穴は側柱のみである。柱間は、南北1.7m、東西1.5mであり、面積は25.5㎡以上を測る。柱穴の直径は18～80cmとばらつきが大きい。また遺構面の削平のためか、柱穴の深さは深いものでも25cm、浅いものでは数cmと残存状況は良くなかった。西南側は削平により確認できない柱穴もあった。柱穴埋土よりの出土遺物が僅少のため、正確な時期を決定するには至らないものの、中世の建物跡であろうと考えられる。

SB07　調査区の西端において検出された掘立柱建物である。２間分の柱穴１列を確認した。柱

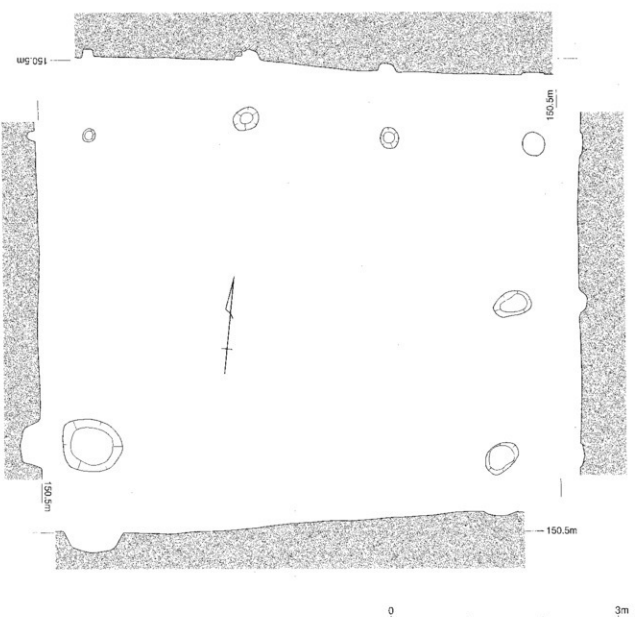


fig. 34　SB06平面・断面図

堀形は、直径50～70cmとやや大きいが、遺構面が大幅に削平を受けている様子で、断面観察による柱穴の深さは、深いもので40cm前後であった。さらに西側へひろがると考えられたため一部拡張したが、後世の耕作による削平のため、柱穴は確認できなかった。柱穴埋土の出土遺物より、中世の建物跡と推定される。

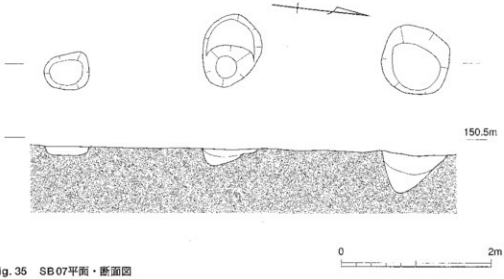


fig. 35　SB07平面・断面図

SD01　調査区の北辺に沿って走る東西方向の溝である。現代の水路によって削平されており、底部が部分的に検出された。出土遺物には鋳銅製の把手金具があるが、混入の可能性がある。室町時代の遺構と推定される。

SD02　SD01の南側に接して流れる幅30～90cm、深さ20cmほどの溝である。一部SD01に切られる部分がみられる。埋土よりの出土遺物には、鎌倉時代の土器類、矢鉄、釘といった鉄製品がある。

SD03　調査区中央を南北に流れる幅70cmほどの溝である。調査区北半部では、削平により確認されなかった。出土遺物には、中世の土器類がある。

SX01　南北２m、東西6.2m、深さ20cmほどの土坑である。西端が広く、東に向けて徐々に幅を狭めてゆく平面形を呈する。出土遺物には中世の土器が見られる。

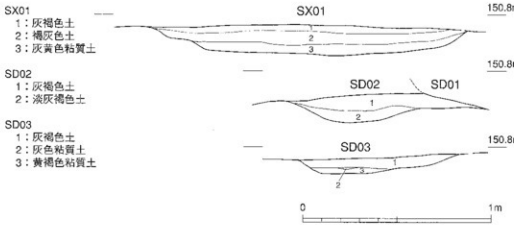


fig. 36　SX01・SD02・03断面図

遺物

11区で図示できた出土遺物は、溝および包含層出土の土器類・金属製品計11点である。

須恵器

100～103はSD02出土の須恵器塊であり、器面をロクロナデで仕上げる。100は復元口径15.5cmを測り、101は復元口径16cmである。102は復元口径16cmである。103は復元口径16cmである。以上4点はいずれも13世紀代に属する遺物である。104はSD02出土の土壙で復元口径22cm、口頸部高2.8cmを測る。やや外傾する口頸部に、偏平な球形を呈する胴部が付くタイプである。内面から口縁部、外面頸部までヨコナデで調整し、胴部外面は8条／3cmの平行叩き調整である。12世紀後半～14世紀前半の遺物である。

土師器

鉄製品

105はSD02出土の鋳造矢鏃である。腐食によりクラックが著しく入る。頭部幅4.7cm、頸部最大厚2.6cm、残存長4.7cm、残存重量68.3gを測る。106は包含層出土の頭巻釘である。長さ7.8cm、横断面が10×7㎜の長方形を呈する。重量は12gを測る。107はSD02出土の折り曲げ釘である。長さ6.1cm、横断面が7×6㎜の正方形を呈する。重量は7.1gを測る。108はSD02出土の頭巻釘である。長さ3.6cm、横断面が7×5㎜の長方形を呈する。重量は3.9gを測る。

銅製品

109は包含層出土の銅銭で、銭径21㎜以上、内径18㎜、銭厚1.1㎜、残存量目1.3gを測る。X線透過画像での観察からは、北宋銭の「元祐通寶（初鋳1086年）」であることが判明している。110は近現代耕作土より出土した、煙管吸口の完形品である。厚さ約0.4㎜の銅板を丸めて筒状に接合しており、ラウの取り付け部にも接着痕が観察できる。全長は10.5cm、最大径9㎜、吸口側端部径2.5㎜、重量4.3gを測る。また吸口側端から約1.7cm付近の対向した位置に圧痕が存在し、喫煙時の歯形と考えられる。江戸時代の遺物である。111はSD01出土の銅製把手金具で、長さ4.5cm、高さ1.9cm、最大幅7.3㎜、最大厚2.7㎜、重量5gを測る。111に関しては、SD01は室町時代の遺構であるが、後世の混入の可能性は否めない。

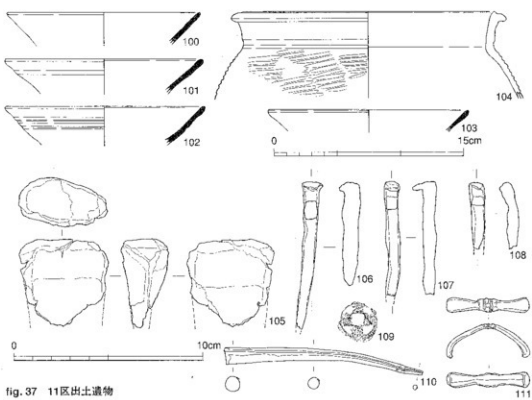


fig. 37　11区出土遺物

（10）12区

幅3.0m、延長45mほどの南北に長い調査区であり、現代の耕土、床土以下、包含層の灰黄色粘土を挟んで地山層である黄灰色粘土に至る。調査区の南部において、近世以降のものと思われる石組みの水路がみられた。その他の遺構は、確認されていない。

（11）13区

7区の東側に位置する、南辺28m、東辺20mほどの三角形の調査区である。

基本層序は、耕土、床土以下、包含層である淡灰黄色細砂質粘土を挟んで、遺構面である黄灰色礫まじり細砂になる。

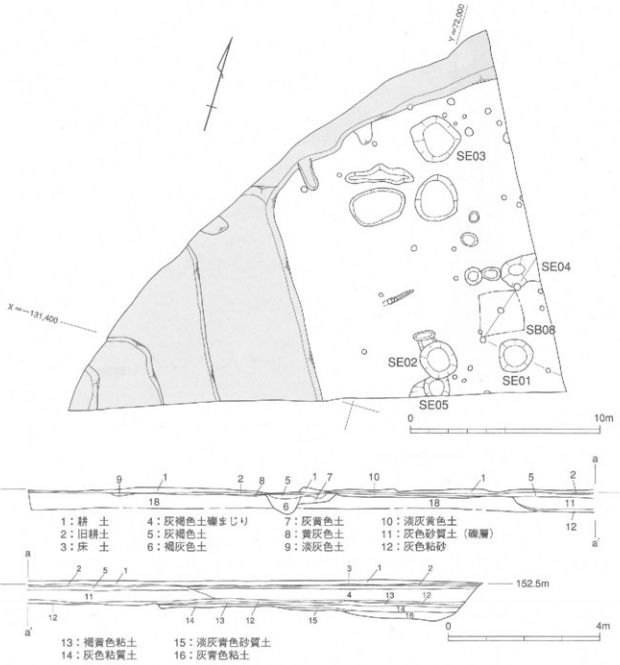


fig. 38　13区遺構平面・南壁土層断面図

遺構

調査区の西半分と北側部分においては、近世の施工と思われる整地のため20～30㎝ほど掘り下げられ、拳大の礫が多量に詰められていた。また遺構としては、中世のものと考えられる掘立柱建物１棟以下、近世のものも含めて井戸５基、土坑５基、ピット等を検出した。中世に属する遺構については、15～16世紀に位置づけられるものが多いようである。

SB08　調査区の南東隅において検出された東西２間（3.8m）以上×南北２間（3.3m）以上の掘立柱建物である。柱穴の直径は25～40㎝、検出面からの深さは14～45㎝程度である。東側の未調査地にひろがるものと思われる。柱穴埋土の遺物が僅少のため、詳細な時期決定は困難であるが、中世の遺構であると考えられる。

fig. 39　SB08平面・断面図

SE01・02・03　調査区の東部において直径２m前後、深さ１m弱の素掘りの溜め井戸状の遺構を３基検出した。いずれもラッパ状に上方に開く形状である。埋土の中層には、拳大の礫が厚さ数10㎝にわたって、詰められている。

SE04　直径130㎝、深さ80㎝ほどの円形の遺構で、素掘りの溜め井戸と思われる。井戸枠などの施設は認められていない。

SE05　直径130㎝ほどの円形の遺構である。南側半分のみを検出した。SE02によって北側の一部を切られる。

SX06　幅70～80㎝、長さ約3.6m、深さ約35㎝を測る不定型の溝状遺構で、断面は逆三角形を呈する。出土遺物には、中世後期の土器、陶器と、鉄製品として鉄鏃がある。

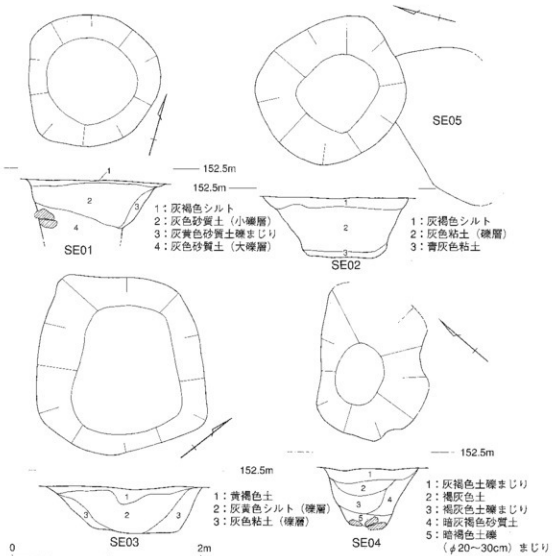


fig. 40　SE01～04平面・断面図

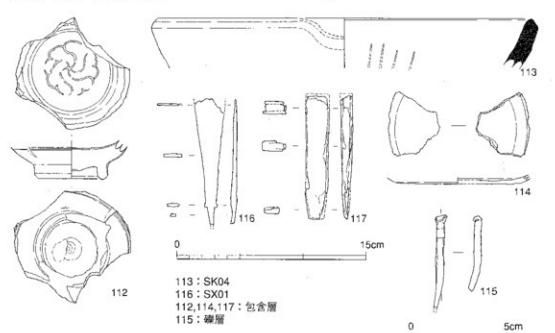


fig. 41　13区出土遺物

遺物

図示した出土遺物は、遺物包含層の淡灰黄色細砂質粘土層および礫層、あとは遺構出土のものである。

青　磁　112は包含層出土の明代（15世紀代）広東産の青磁碗底部である。削り出し高台を有し、高台径は6㎝、高台高は1.3㎝を測る。全体に施釉した後、高台畳付けから高台内面にかけ、釉を削り取っている。内面見込み部には花弁文が、外面にも水平な直線などが印刻される。

丹波焼　113はSK04出土の丹波焼の擂鉢である。口縁部はやや内湾しており、端部は面取りされて外傾する。内面卸目は一本引である。16世紀代のものと考えられる。

鉄製品　114は包含層出土の板状鋳鉄製品残欠で、長径5㎝、最大厚4㎜、残存重量13ｇを測る。弧状に湾曲することから、鉄鍋の底部片と推測できる。復元底径は約9㎝である。115は礫層出土の頭巻釘で、残存長4.9㎝、横断面は5×5㎜の正方形を呈し、残存重量2ｇを測る。116はSX06出土の斧箭式の鉄鏃で、全長9.8㎝、茎部残存長1.4㎝、刃部残存幅2.3㎝、茎部幅3～5㎜、最大厚5㎜、残存重量10.4ｇを測る。また刃部の茎につながる部分は若干幅広になって突出する。117は包含層出土の鍛鉄製鑿である。残存長9.8㎝、最大幅1.9㎝、最大厚1㎝、残存重量48.9ｇを測る。金工に関連する遺物であろう。

(12) 14区

幅3.0m、延長70mの南北に長い調査区である。南から北にかけて傾斜している。

基本層序は、北部では、耕土、床土以下包含層である灰褐色粘質土を挟んで遺構面である黄灰～灰色粘土に至る。中央部においては、耕土直下で遺構面である淡灰黄色粘土となり、北部においては、灰茶色土の包含層を挟んで淡黄褐色粘土の遺構面となる。

調査区南～中央部にかけて、耕作痕と考えられる溝、ピット数基が確認された。

(13) 15区

幅3.0m、延長80mで、淡河川の段丘崖に沿って設けられた調査区である。

層序は一定せず、耕土直下で地山層となるところ、幾度かにわたる田圃の造成による整地層がみられるところや谷筋への深い流土が堆積し地山の確認されなかった部分などある。

遺構

遺構としては、調査区北部において40×60㎝、深さ10㎝ほどの焼土坑1基が検出された。

遺物

15区では包含層出土の遺物が少量あるのみで、図示できるのは以下の3点である。

fig. 42　15区包含層出土遺物

土師器　118は土師器土鍋で、復元口径28cmを測る。口縁内面は押圧して断面三角形に肥厚させる。外面は口縁端部から2.5cmはヨコナデするが、それ以下は9条／3cmの平行叩きで調整している。15世紀後半～16世紀前半に位置づけられる。119は土師器羽釜で、復元口径22cmを測る。口頸部は僅かに外反しながら外傾し、偏平な球形の胴部へとつながる。内面から口縁、頸部にかけてはヨコナデし、胴部は8条／3cmの平行叩きで調整する。12世紀後半～14世紀前半の遺物である。

第3節　鉄製品生産関連遺物

（1）はじめに

第1次調査で出土した遺物には土器、陶磁器以外に金属製品が見られるが、銅製品にくらべ、鉄製品が多く出土している。製品には本章第2節の各項に記したように、鍛造品の刀子・火打金・鉄釘など、また鋳造品と考えられる鉄鍋片様の板状製品・矢鉄などがある。これらは墓址出土の2点を除いて、殆どが包含層出土のものであり、その所属時期については中世のものであるという以上の詳細な確証は得られていない。

また、今回の発掘調査においては、遺構としては近世のものしか確認されていないものの、これら鉄製品の生産に関わる遺物、特に炉壁材・鉱滓・鉄塊・鋳型などが中世包含層を中心に出土しており、周辺における生産工房の存在が想像される。本節では、こうした鉄製品生産関連遺物について若干の考察を行う。

（2）遺物の出土分布

今回調査において出土した中世の生産関連遺物は、総点数にして340 点で、内訳は炉壁

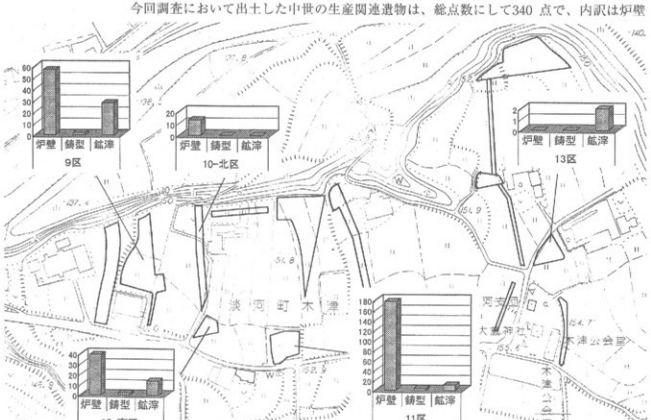


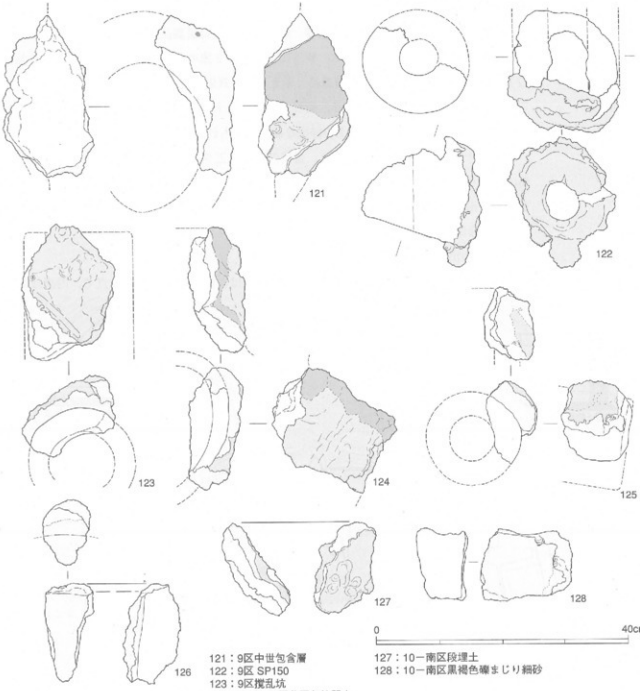
fig. 43　鉄製品生産関連遺物分布状況（S=1：2,500）

材（炉内外滓付着のものを含む）288点（数量比84.7%）、鋳型８点（数量比2.4%）、鉱滓（鉄塊系遺物を含む）44点（数量比12.9%）である。また中世のものと認定できる鉄製品は44点、銅製品は２点である。これらを出土地区別に表したものがfig. 43である。それぞれ出土状況の差が大きく、単位面積当たりの出土数を反映出来ていない点と、同一層出土の集計ではないため、積極的に工房の位置の推定にまで言及できないことが実情である。しかし大まかに９区・10－南区・11区周辺の、やや段丘崖から離れた平坦地に遺物が集中していることから、この周辺に生産工房の存在が推測できよう。

（３）出土遺物の概要

炉　材

炉材の破片の存在は、その地において生産が行われていた積極的な物証である。包含層



121：9区中世包含層
122：9区 SP150
123：9区攪乱坑
124・125：11区黄灰色粘質土
126：11区南溝内
127：10－南区段堆土
128：10－南区黒褐色礫まじり細砂

fig. 44　鞴羽口・炉壁

や攪乱層出土のため、原位置を保ってはいないものの、集落内に生産工房が存在したものと推定される。今回出土した炉壁材は断面形状が内湾、もしくは外反するものが多い。もし溶解炉であるならば、破片の形状その他から、おそらく竪型炉であった可能性が高い。また直径を復元できるものはないものの、さほど大型の炉ではなかったものと推測できる。炉壁材には粘土に砂、スサ、籾殻などを混和剤にしたものが使用されており、内面に炉内滓、また外面に流出滓の付着するものが殆どである。炉壁に付着する滓は表面の肉眼観察によって、

1類：表面が滑らかで、黒色～瞻脂色を呈するもの

2類：ガラス化（オリーブ色～灰色）した壁材もしくは礫が付着するもの

3類：黄褐色～茶褐色の鉄錆状の鉱物が析出するもの

4類：熱により硬質化するものの、ガラス化しきっていない表面灰色のもの

などに分類でき、炉壁の部位には炉の甑の部分、輔から炉に接合する羽口の部分がある。

輔羽口

羽口には外見上の観察によって2タイプが出土している。断面が縦楕円の、径が大きく、外面に表面の滑らかな瞻脂色～黒色を呈する、1類の滓が付着するものと、内径が4㎝前後の小型のもので、断面が真円に近いものである。121・124は大型のもので、表面には1

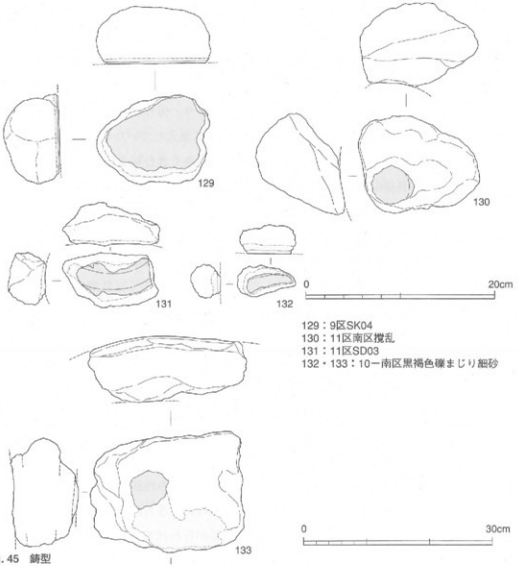


fig. 45　鋳型

類の炉内流動滓が付着する。また上部には灰色を呈する、ガラス質の付着物が存在する。これは燃料の炭が燃焼した際の灰が付着し、釉薬状に融解したものであろう。122・123・125は小型の類であり、炉内に突出した部分には大型品同様、1類の炉内滓、ガラス質に溶解した2類の滓が付着する。

大型のものの類例には、市内西区伊川谷町潤和の白水遺跡の、梵鐘鋳造遺構に伴う甑形溶解炉に付属する羽口が存在する。白水遺跡の梵鐘鋳造遺構は11世紀前半に遡るものであり、当遺跡の所属時期にはやや先行するものであるが、形状は非常に似通っている。ただし白水遺跡のものは、銅製品の鋳造を行ったものであり、当遺跡において生産されていたものは鉄製品と考えられるところに違いがある。

炉　壁　炉壁は126～128の3点を図示する。126は内面に滓の付着はなく、胎土が熱によって溶解し、ガラス化した4類の炉壁材である。127は内面に1類の滓が付着している。128は、緑灰色のガラス化した2類の炉内滓が内面に付着するものである。炉壁材は290点近くの破片が出土しているが、何れにも胎土にスサや籾殻を混和しているようである。

鋳　型　また炉本体材料以外に、生産を物語る出土遺物には鋳型がある。今回の調査で出土した鋳型は8点で、いずれも全体の内のごく一部の破片であるため、どのような製品を制作していたのか不明ではあるが、とりもなおさず、これら鋳型の出土は周辺に鋳物工房が存在したことを示唆するものに違いはないと考えられる。

129は9区のSK04より出土した真土鋳型片で、残存する長径6.4cm、厚さ2.9cmを測る。重量は72.2gである。籾殻などを混和した荒い粘土の上に細かい粒子の粘土を塗って仕上げられている。鋳型表面はほぼ平坦であり、何らかの器物の平坦な部分を形作る一部であったと考えられる。130は11区の攪乱坑に混入していたものであるが、中世期の遺物である可能性があり、図示した。比較的砂粒を多く含む粘土によって成形される鋳型片で、残存する長径6.2cm、厚さ4.3cm、重量89.5gを測る。鋳型表面はごく一部しか残存していなかったが、やや内湾する凹面を呈し、何らかの容器を制作した可能性もある。131は11区SD03出土である。ほぼ均質な、やや砂粒を含む粘土で成形されており、長径4.8cm、厚さ2.1cm、重量25.8gを測る。内型か外型いずれかは不明であるが、内湾して立ち上がり、円形の平面形を呈する形の器物を鋳造したと考えられ、恐らくは鉄鍋などの型であろうかと推定できる。132は、10－南区の黒褐色礫まじり細砂層より出土した、残存する長径2.9cm、厚さ1.5cm、重量4.9gを測る鋳型片である。129に類似しており、籾殻や藁を混和した荒い粘土で成形した上に、均質精緻な粘土を表面に塗って仕上げている。細片のために全体像は未詳であるが、平坦面を作りだしていることが分かる。133は、10－南区の黒褐色礫まじり細砂層より出土している。外表面が残存しており、外型であることが分かる。残存する長径は11.8cm、高さ8.8cm、厚さは5cm、重量は444.6gを測る。胎土は大まかに4層に分けられる。工程に沿って見ると、籾殻、籾殻を含む荒い粘土を使って中心となる部分を作り、これを2層にわたって形成する。この荒い粘土は輪積み技法によって制作されており、その外面には粘土の帯同土を接合したあと、補強のためさらに粘土を用いている。一方内面は、比較的精緻で均質な粘土による表面の成形が行われている。一部分のみの出土であり、直径を復元することは容易ではないが、外径でおよそ50cm内外の大きさがあったと推測できる。また

内表面の観察では、平面形が円形を呈する器物が制作されたことが推定できる。

鉱　滓

以上の遺物によって、生産工房の存在が推定されるが、一方生産に伴って生ずる遺物が鉱滓や鉄塊系遺物などである。今回の発掘調査では、炉壁材の出土量に比べると比較的少量の出土に留まったが、その存在は当地において、操業が行われていた証拠の一つといえる。これらは理化学的な分析を実施してはいないため、詳細は不明な部分が多いものの、全てが鉄器生産に由来するものと考えられる。肉眼観察による形状的な分類では、以下のようなものがある。（サンプル名は、断面観察に供したもの。写真図版参照）

・表面に凹凸が少なく、黄褐色の不定形なもの（サンプルA、比重2.80）
・表面が滑らかで、黒色～脂肪色を呈する流動滓（サンプルB、比重1.91）
・平坦な板状で、暗青灰色を呈する滓（サンプルC、比重3.03）
・中心部にメタルが存在し、周囲に腐食層のある鉄塊（サンプルD、比重4.06）
・椀型滓で、表面の凹凸が少なく、暗緑灰色を呈するもの（サンプルE、比重2.96）
・椀型滓で、表面の凹凸が少なく、黄褐色を呈するもの（サンプルG、比重3.03）
・椀型滓で、表面が多孔質のもの（サンプルF、比重2.97）

断面観察

鉱滓については上記の7点について断面サンプルを作成し、金属顕微鏡による微視的な組織の観察を行った。サンプルは岩石切断用のダイヤモンドカッターによって、上下の分かるものについては垂直断面に切断した。断面研磨は＃1000～＃3000の研磨粉および6μm～3μmのダイヤモンド懸濁液において行った。また5％の硝酸－アルコール溶液を用い、各サンプルに適宜エッチング処理を施し、観察を行った。

結果、これらが鉄製品の生産に由来するものである事がある程度推定できた。サンプルBには大小2種の粒状ヴィスタイト、ガラス質スラグ、サンプルDにはエッチングによって粒界が観察できたフェライトらしき組織および非鉄金属塊、サンプルE・Fに放射棒状のファイヤライト＋微小粒状ヴィスタイト、ガラス質スラグ、サンプルGに大小の粒状ヴィスタイトなどが観察できた。またサンプルAについては、Feに由来する腐食物とおぼしき結晶が、またサンプルCについては非金属物質と考えられるものが見られた。

いずれにせよ、これら生産遺物が、製鉄（製練）→大鍛冶（精錬）→鍛冶、もしくは鋳造のいずれの工程において生じたものであるかを解明するには、Feとその他の元素の組成比について、理化学的な分析を行う必要がある。今回はこれを行っていないため、詳細が未検証のままである。今後、周辺の遺跡の資料等との比較や、当遺跡の性格を確認するため、理化学機器による金属学的な分析を行う必要がある。

（4）まとめ

淡河地区では最近の発掘調査において、鉄製品を中心とした金属製品の生産に関係のある中世期の遺物が増加してきている。中世、特に室町期には全国的に手工業生産が発達し、地方の農村部においても、農工具や刀子、煮炊具等に鉄製品が普及することが知られる。このことは各集落に製鉄ないしは鋳物、鍛冶などの鉄製品を製作、もしくは修理する工房が存在し、恒常的な需要があったことは想像に難くない。木津の集落にも何らかの鉄製品製作に関わる工房があり、職人が存在したことが想像されよう。

第4節　小結

第1次調査では、鎌倉時代～室町時代を中心とした遺構がまとまって検出され、木津遺跡の様相が一部ではあるが確認できた。事前の試掘調査の結果では、段丘上半部においては遺構の存在は確認されておらず、段丘崖に面した縁辺部に埋蔵文化財の存在が想定された。調査の結果、東端の地区では顕著な遺構は確認されなかったものの、中央部から西半にかけての地区において、遺構および遺物がある程度のまとまりを持って検出された。

検出された中世期の遺構は、鎌倉時代初頭（12世紀末ころ）のものを端緒に、室町時代前期（15世紀代）に至る掘立柱建物8棟をはじめとして、鎌倉時代の墓坑、庭園に伴うと想像される、鎌倉時代から室町時代まで存続したと考えられる園池状の堀り込みと石組み、また居住域であることを示す多数のピット・土坑などである。また、近世以降のものとして、井戸や金属製品生産に伴う炉などが検出された。また遺物のみではあるが、中世期より、鉄製品の生産工房の存在が推定できる資料が得られ、遺跡の存在する範囲と存続時期、ひいては集落の性格を考える上で、貴重な知見を得ることができた。

参考文献

第2節

古泉弘「江戸の街の出土遺物」『季刊　考古学』第13号　雄山閣　1985

末永雅雄『増補　日本上代の武器』木耳社　1981

高橋幸男『火の道具』柏書房　1985

中世土器研究会『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

奈良県立橿原考古学研究所『久安寺モッテン墓地跡』奈良県文化財調査報告書70　1995

日本貨幣商共同組合『日本貨幣型録』2000年度版　1999

兵庫県教育委員会『中尾城跡』　1989

兵庫県教育委員会『神出窯跡群』　1998

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V　1996

妙見山麓遺跡調査会『神出』　1990

森浩一編『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第6冊
同志社大学考古学研究室　1990

第3節

大澤正己「木瓜原遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『木瓜原遺跡』滋賀県教育委員会、
財団法人滋賀県文化財保護協会　1996

大澤正己「相馬市山田A遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『相馬開発関連遺跡調査報告』V
福島県教育委員会、財団法人福島県文化センター、地域振興整備公団　1996

大澤正己「比恵遺跡第57次調査出土鉄製品の金属学的調査」『比恵遺跡群』(24)
福岡市教育委員会　1997

大澤正己「西吉田北1号墳とその周辺遺跡出土鉄製品の金属学的調査」『西吉田北遺跡』
津山市教育委員会　1997

東京工業大学製鉄史研究会『古代日本の鉄と社会』平凡社選書78　平凡社　1982

清永欣吾「鉄器・鉄滓の分析」『考古学ジャーナル』№313　ニューサイエンス社　1989

五十川伸矢「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集
国立歴史民俗博物館　1992

鈴木正貴・藁山誠一「愛知県における鉄器生産について考える（4）」『研究紀要』第1号
財団法人愛知県教育サービスセンター、愛知県埋蔵文化財センター　2000

鈴木正貴・藁山誠一「愛知県における鉄器生産について考える（5）」『研究紀要』第2号
財団法人愛知県教育サービスセンター、愛知県埋蔵文化財センター　2001

枚方市教育委員会『枚方市立旧田中家　鋳物民俗資料館』1997

山本雅和編『白水遺跡第4次』神戸市教育委員会　1999

吉田晶子編『枚方の鋳物師』(一)　枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会　1990

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　第２次調査の概要

第２次調査は、第１次調査地９区の西に接する一段低い水田において調査を行った。調査地は、圃場整備区域から、淡河川を渡り県道三木・三田線に接続する橋梁取り付け部から南側の付帯道路予定地幅８ｍ～14m、延長70mの区間について調査実施した。

基本層序

調査地の基本層序は、現在の耕作土直下に南部では灰褐色砂礫、北部では淡灰色極細砂質シルトと黄灰褐色砂礫が互層になって堆積し、河岸段丘を形成する地山面となっている。ただ調査地の中央部では、地山凹部に微細な土師器片を含む暗茶褐色砂礫層がレンズ状に堆積している他は耕土直下に河岸段丘を形成する地山面がみられる。この地山面は現地表から20cm～70cmの深さで、北方向に緩傾斜し、調査地の北辺は急傾斜の段丘崖となり淡河川河川敷に落ち込んでいる。

遺構

検出した遺構は、調査区北部では掘立柱建物１棟、土坑１基、南部では調査区南辺沿いに舌状の落ち込み１ヶ所、この落ち込み埋没後に掘り込まれた石組みの井戸１基を検出した。

SB01

調査区北部中央よりで検出した東西２間以上、南北１間以上の掘立柱建物である。建物の西側は調査区外となっている。南北辺の間柱が検出されず、後世の削平による滅失か、本来柱を設けていなかったものかは不明である。また、南北辺の北側に位置する柱穴１基については、他の柱間の間隔が均一であるのに対し、柱間に差があることから、当該建物に付属しないものとした。

掘立柱建物の規模は、東西4.5m以上、南北4.0m以上で、柱間間隔は東西で2.1m等間、南北で4.0mを計測する。柱掘形はいずれも径40cm～50cm前後の不整形な円形掘形で、深さは14cm～20cm前後を残存させる。掘立柱建物の南東隅柱と考えられる柱掘形は西側に柱の抜き取り痕跡を残す。また、一部の柱掘形では掘形底部に30cm大の扁平な河原石を据えて柱の礎盤としている。

出土遺物は、柱掘形埋土から土師器塙胴部片が出土している。

SK01

掘立柱建物SB01の北東側で検出した不整形な楕円形をした土坑である。長径2.７m、短径2.3m、深さ10cm～30cmを計測する断面皿状の土坑である。被覆土は灰褐色砂質土で、被覆土内からは陶器擂鉢体部片が出土した。

SX01

調査区南端で検出した不定形の落ち込みである。幅が西端で3.5m前後、深さは60cm～90cm前後で断面形は台形である。落ち込みの底部は平坦で、南西方向に緩やかに傾斜している。被覆土は、下層に暗茶褐色土（礫混じり）、上層に茶灰褐色砂質土（礫混じり）が堆積し、一機に埋没したと考えられる。被覆土内からは、土師質の大型捏ね鉢底部片や陶器片が出土している。

SE01

落ち込みＳＸ01の西南端、調査区南壁沿いで、ＳＸ01の埋没後に構築された石組みの井戸である。南北1.43m、東西1.28mの楕円形の掘形を掘り、西側は３段、東側は２段にほぼ垂直に段掘りして掘形をつくる。一段目は直径45cm、深さ25cm前後の円形に掘り下げ、石組を施していない。井筒等を据付たと想定されるが、被覆土下層から竹材が出土してい

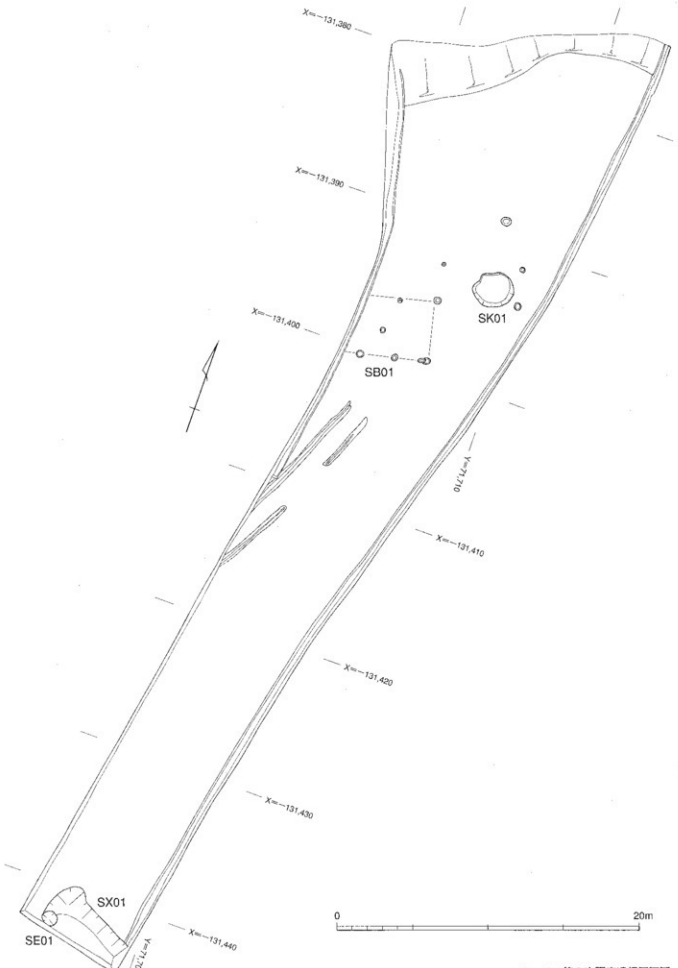


fig. 46　第 2 次調査遺構平面図

る以外は井筒の構造を推定する資料はない。桶等が据えられていた可能性がある。一段目以上は、10cm～30cm大の大型の河原石に角礫を交え一直に乱積みし、石材の間隙には小型の川原石を充填している。深さは1.65mを計測する。

出土遺物は、被覆土の上層部から陶器擂鉢片が出土し、下層部からは小型の白磁鉢、瓦片が出土している。

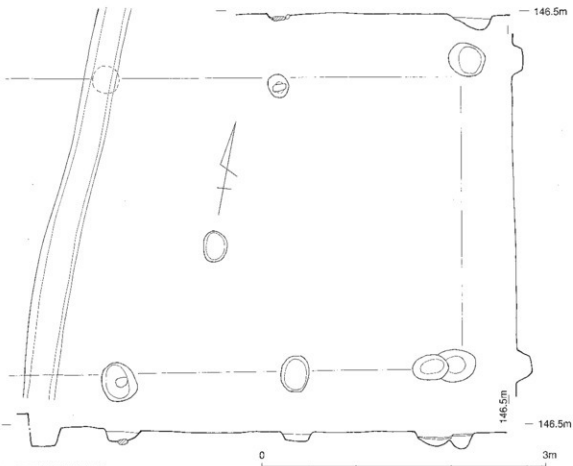


fig. 47　SB01平面・断面図

遺物

調査区中央の一部で遺物包含層を検出した以外は、耕作土直下が遺構面となっているため、遺物の出土量はわずかであった。現在の耕作土・床土、遺物包含層内からは13世紀～16世紀の土師器・陶器片が出土している。図化できたのは、土器片１点、また比較的遺物の出土量の多いSE01被覆土内出土の磁器１点と陶器片１点である。

土師器皿１は遺物包含層内から出土した。やや外反気味に立ち上がる口縁部に丸い体部をもつと考えられる。体部はほとんど欠損するが、口縁部との境は断面三角形の鍔で画される。口縁端部は内傾する。

磁器鉢２は猪口様の小型品である。外上方に直線的にのびる体部直下に１㎜強の高台を付け、高台端部はヘラケズリを行う。胎土は精良で黒色極細砂粒を含む。色調は全体に灰乳白である。法量は口径5.6cm、器高3.1cmを測る。

陶器擂鉢３は本来捏鉢として使用されたが、後に鋭利な金属器で体部内面に斜格子状の擂り目を施し擂鉢として使用している。外上方に直線的に伸びる体部に、折り曲げてやや内湾する口縁部をつくる。口縁端部は丸くおさめる。丹波産の鉢と考えられる。

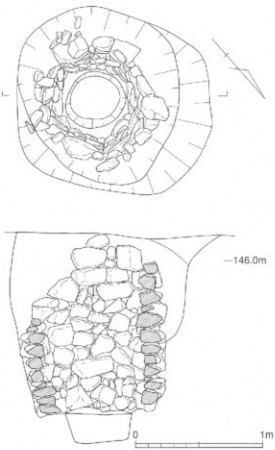
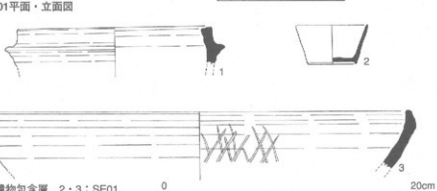


fig. 48　SE01平面・立面図



1：遺物包含層，2・3：SE01

fig. 49　第２次調査出土遺物

第２節　小　結

第２次調査の調査地は第１次調査地９区の西隣に位置し、９区と同様に鎌倉時代前期の掘立柱建物や園池に関連する遺構が検出されると予想された。しかしながら、今回の調査地は、地表面で約60cmから１ｍ低く、地形の上でも西側に小河川が北に流れ、後世の自然災害や耕作等による削平を被ってきたものと思われる。これは、１区で主要な遺構を検出した明灰黄色礫混じり粘土の遺構面が、第２次調査地では検出されず、現在の耕土および地山の窪地に再堆積した遺物包含層から中世後期の遺物を交えて鎌倉時代前期の遺物が出土することからも推し量れる。このような状況で検出した掘立柱建物は９区検出の大規模掘立柱建物に対して建物方位をやや西に振るものの、20cm～30cmの深さを残す柱掘形を設けて造営されており、掘形の規模も比較的大型で、９区検出の掘立柱建物の規模に近い建物であった可能性がある。このことは、園池を備える屋敷地が当該調査地に広がっていたことを窺わせ、傾斜地ながら相当の造成によって宅地が整備していたことを示している。

第Ⅳ章　まとめ

淡河木津遺跡の第１次および第２次調査においては、鎌倉時代～室町時代、また江戸時代に至り連綿と営まれた集落の遺構が多く検出され、調査以前に知られていなかった、当該時期の集落様相が、比較的まとまりのある形でとらえることができた。以下に調査の成果について、遺構の集中した地区を中心にまとめる。

第１節　淡河木津遺跡の遺構・遺物

掘立柱建物

第１次・第２次調査で検出された遺構は居住地を中心としたものである。特に第１次調査９区南半周辺は遺構の密集する部分であり、第１次調査SB03・04、第２次調査SB01の３棟の、比較的大型の掘立柱建物が検出されている。また９区北端の段丘北辺では、他の建物と主軸方向を違えたSB05が検出されている。特にSB03・04は重複して建てられていることから、同一の屋敷地内において、建て替えが行われたことは明らかといえよう。一方、９区の中央部は遺構が希薄であるが、屋敷地の地盤が中央のやや盛り上がった地形であるため後世の削平によって、遺構が失われた可能性が高い。よってこれら４棟の掘立柱建物の間の空白部分には、かつては何らかの建造物やその他屋敷に関連のある施設が存在した可能性がある。屋敷を構成する遺構には、建物以外に土坑・墓址・園池状遺構などが検出された。

土　坑

土坑（SK02～04）は建物と同一面、建物内で検出したもので、鉄製品生産に関連する炉壁や滓が、少量ではあるが投棄されていた。時期的には建物の存在した時期に近いものと考えられるが、柱穴との切り合い関係が確認できないため、前後関係については未詳である。建物が建てられる以前もしくは建物の廃絶後に、周辺において行われていた生産行為に伴うものと想像できる。

墓　址

墓址（ST01）からは、土壌化が著しかったものの、成人の脛骨か腓骨と考えられる人骨が出土し、供献遺物では龍泉窯系の青磁碗、刀子、火打金等が出土した。人骨の出土状況より、頭位が東向きであった事が確認できた。現地調査の際は、木棺の存在が確認できずに土坑墓の可能性を想定したが、第２章で述べたように遺物の出土状況は、棺蓋上に供献されたものが木質の腐朽と共に棺内に転落したと考えられ、木棺墓であった可能性が高いと思われる。第２次調査のSB01が９区の建物と同じ屋敷地に存在するとしたならば、ST01は両建物に挟まれた屋敷墓ということになる。中世には土葬と火葬が併存し、土葬墓には伸展葬と屈葬がある。埋葬に棺が使用されたならば、前者は直方体の箱型の木棺であり、後者は桶や曲物、俵に入れて埋葬されたものと考えられるため、本例は直方体の箱型木棺が使用されたのであろう。古代的な様相といえる土葬墓は、13世紀～15世紀の間に火葬墓へと変遷し、16世紀後半以降、再び近世的土葬に変化する傾向がある。当遺跡を上流へ約800m遡った段丘上に位置する行原遺跡では、13世紀代の火葬土坑が２基検出されている。しかし変遷の傾向には大幅な地域差があると思われるため、淡河地区において上記のような変遷が当てはまるかは不明である。

供献遺物

供献された青磁碗、刀子、火打金がある。青磁碗は中国龍泉窯系のものである。見込み部には使用痕と考えられる磨滅が見られ、この器が何らかの使用に供されていたことが分

かる。刀子については、中世の絵巻などに腰刀を佩した人物が随所に見られ、またその人物像も、僧侶から大工、農民など、あらゆる職掌があり、当時の流行に腰刀着装があったことがわかる。また火打金も各職掌の人物が携帯しており、今回出土のものも先述のとおり、実用的な部類のものであり使用痕が見られることから、恐らくは被葬者が生前に携帯していたものを、葬送に際して埋めたものであろう。現在のところ、墓址に火打金が供献された類例は見られない。これらの要素から読み取れる被葬者像については、身分の上下にまで言及できる資料とは言えないものの、当時の流行がこの地にももたらされていたことが想像されよう。

園池状遺構

園池状遺構は、2つの池状の落ち込みが主たる遺構であり、付帯施設として護岸石組みと導排水路としての溝、また景観を形作る景石の堀形と推定されたピットで構成される。これらは建て替え後の掘立柱建物であるSB04に伴う遺構と考えられる。園池の埋土からは、水の溜まっていた状況が見出せなかった。これは、元来池水を溜めない池であったのか、或いは池の底を掃除していたために水を落としていたこと等が考えられるが、正確な事は不明である。また、景石および護岸石組みに囲まれた部分には築山、もしくは前栽があった可能性が考えられる。位置的には、SB04の北側および東側に隣接して園池状遺構が存在しているため、奥の座敷から園池を眺めていたと考えられ、この園池が奥庭であったということが推察される。本遺構の検出は当時の淡河荘の領民の、庭園に対する意識を形として捉えることができた重要な成果であった。

鉄製品生産関連遺物

鉄製品の生産に由来する遺物の存在は、手工業生産が飛躍的に拡大した中世を物語るもので、木津の集落においてもその様相が推測される資料である。ただし遺構が検出されておらず、また理化学分析がなされていないため、その生産工房が如何なる作業工程を行っていたかについては現在不明である。この点については今後調査の余地があろう。

近世溶解炉

10区－南で検出された近世の炉の存在は、集落における農工具等の修繕等を行った工房が想像される。木津地区はかつて、神戸～吉川及び三木～三田それぞれの街道の交差する宿場であったという口承があり、馬蹄の蹄鉄の鍛練を行った鍛冶の存在も想定できよう。また、織豊期には秀吉による三木城攻めが行われたが、それに同行した鍛冶職人の存在も伝えられている。今後、周辺に同様の生産関連遺構が検出される可能性が高いと思われる。

第2節　むすびにかえて

以上のように今回の調査においては、鎌倉時代から室町時代における屋敷地が比較的まとまった形で検出され、その構成をある程度確認できた。また混入とはいえ、縄紋時代に遡る石器も出土し、周辺における生業活動が想像された。しかし、金属製品製作に関する遺物について金属学的分析を実施し、当地における製作状況を明らかにすること、また周辺地域の葬送儀礼の系統を分析するなど、多くの課題が残っている。本報告では遺跡の一部を垣間見たに過ぎず、今後の調査においてさらなる検討を加えることが必要である。

写真図版

淡河木津遺跡遠景　西より

園池状遺構　南より

ST01 北東より

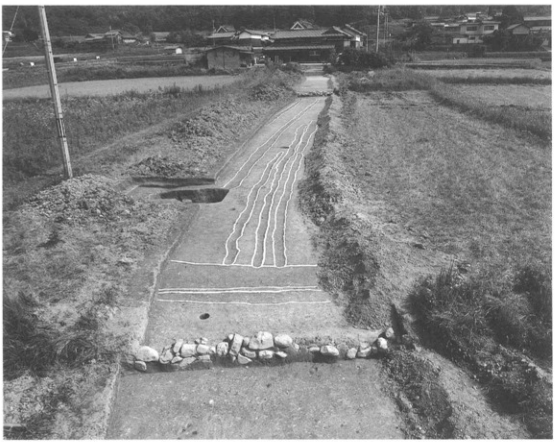
ST01 出土遺物

ST01　出土龍泉窯系青磁碗

第1次調査出土鋳型（左上より、133，130，134，129，131）

第1次調査出土輸羽口（左上：122，右上：121，左下：123，右下：124）

1区全景　北より



3区中央部　北より

6区全景　西より

7区全景　北西より

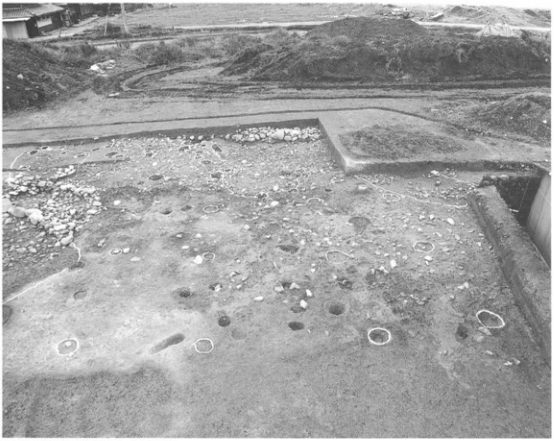
SX01 南西より

8区全景 北東より

9区全景　北より

9区遺構集中部　北より

9区遺構集中部　南より



SB03および園池状遺構　北西より

SB03－P5断面　南より

SB04－P8断面　南より

SB05　東より

SK03　検出状況　南西より

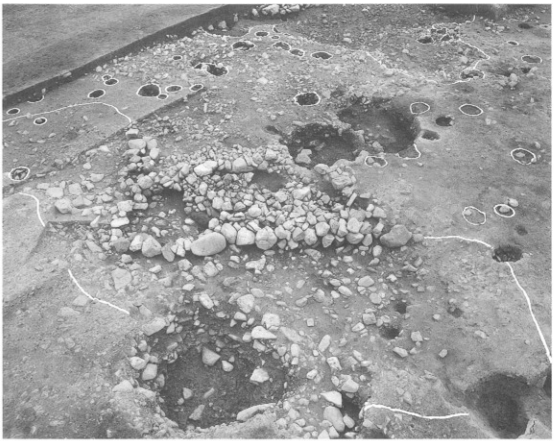
SK05・06　北より

ST01　北東より

ST01　東より

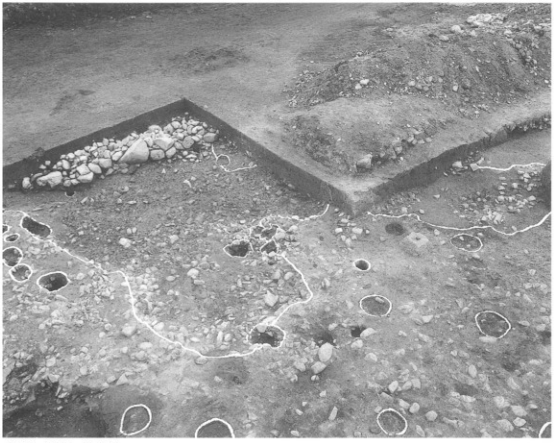
園池状遺構全景　北西より

園池状遺構貯水状況　西より

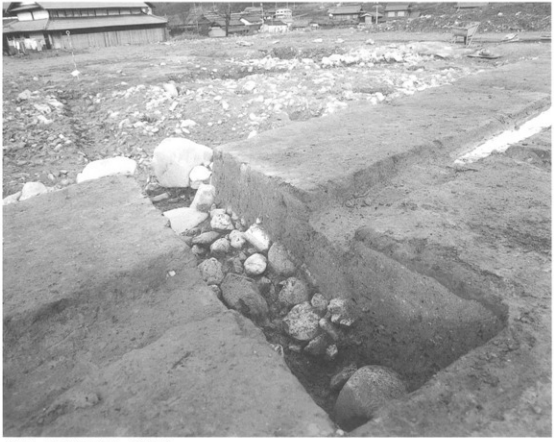


SX02・05 北西より

SX02 断面 西より



SX03・SD04 北西より

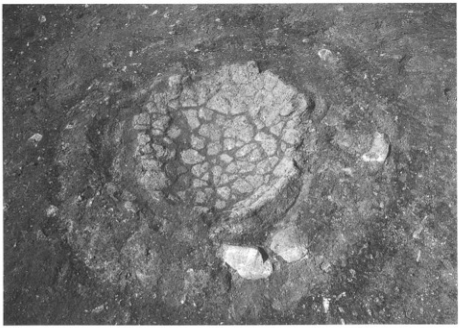


SX03 石組み断ち割り 南東より

SX03　導水路　南西より

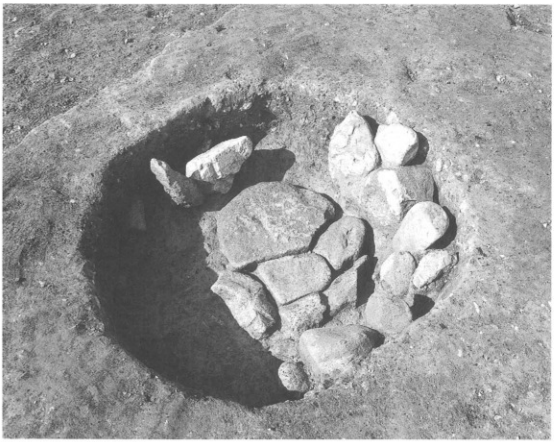
SX03　導水路断面　北東より

10－南区
第1遺構面全景
北東より



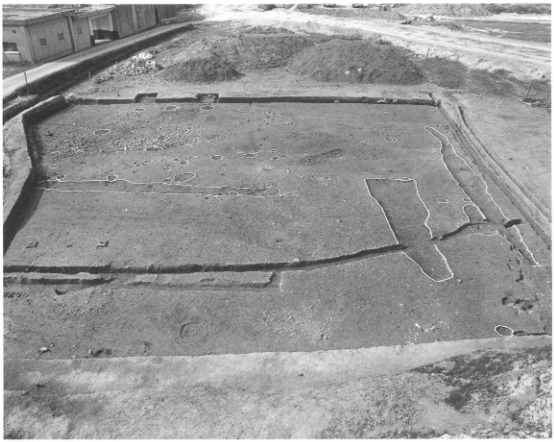
SK07
炉床検出状況
東より

SK07
断ち割り
南東より

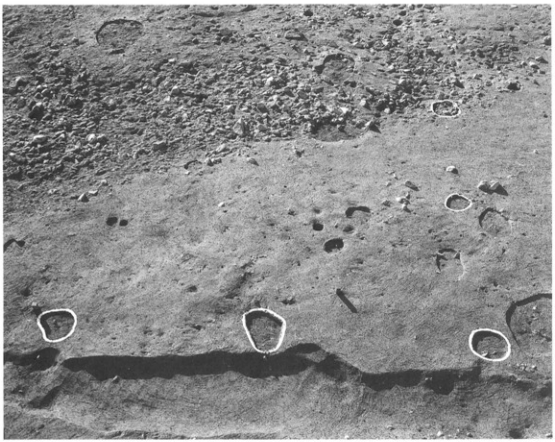


SK07　炉床下層施設　南より

10－南区第２遺構面全景　北東より



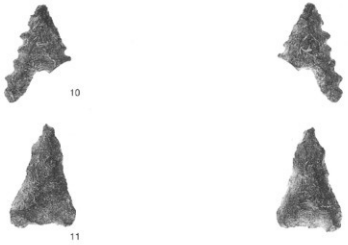
11区全景 東より



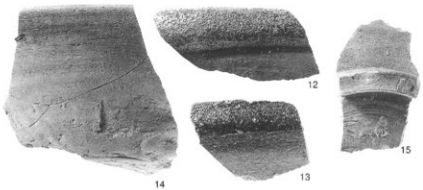
SB06 東より

13区全景　北西より

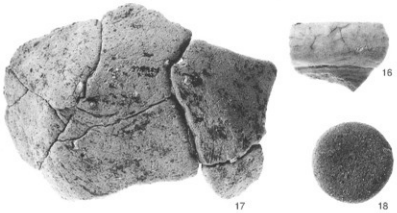
SE02　西より



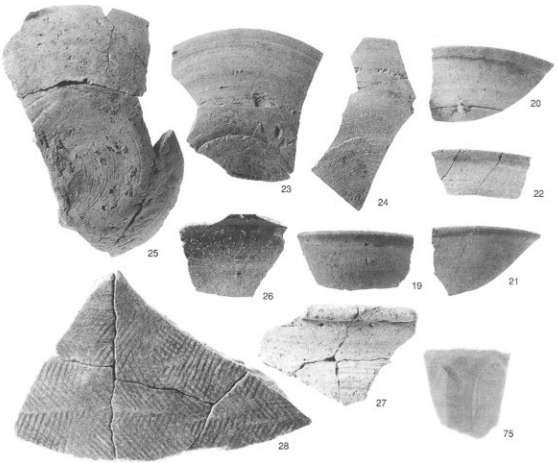
3区出土石器 表・裏



9区SB出土土器



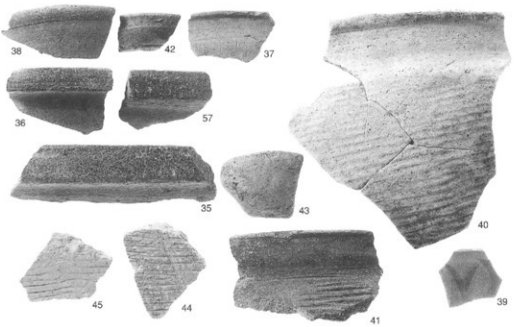
9区SK出土遺物



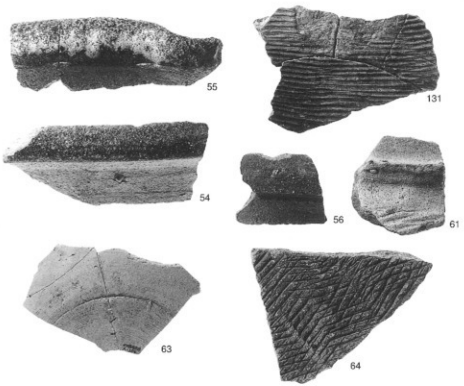
9区SP出土遺物

SP211出土紙石

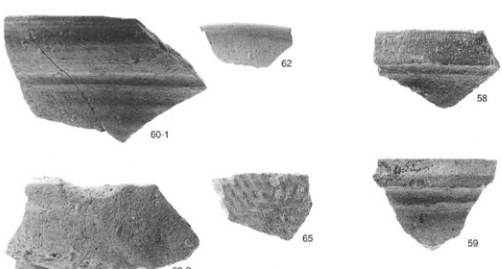
ST01　出土青磁椀



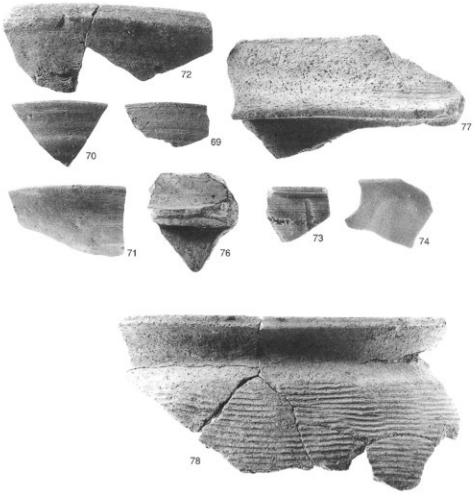
SX02　出土遺物



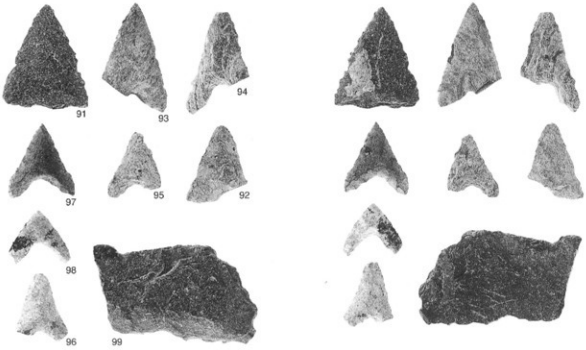
SX03　出土土器



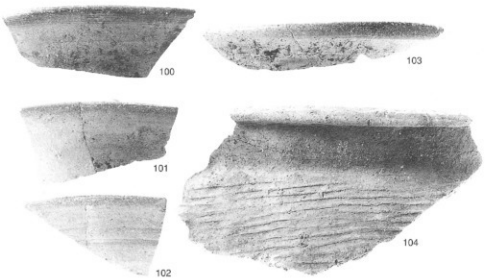
SX04・SD04　出土土器



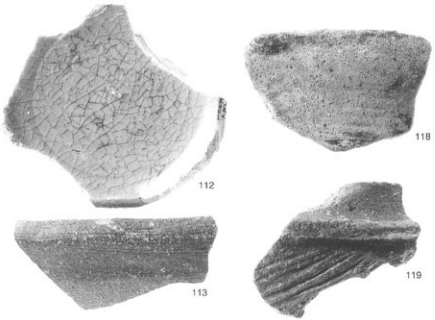
上・右：10－南区出土遺物



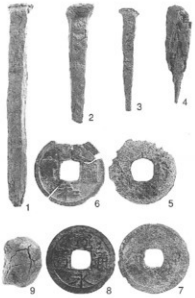
11区出土石器　　同左裏面



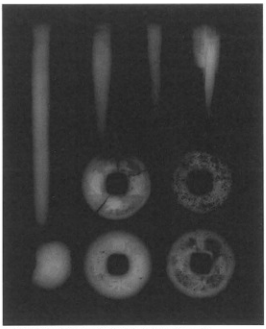
11区出土土器



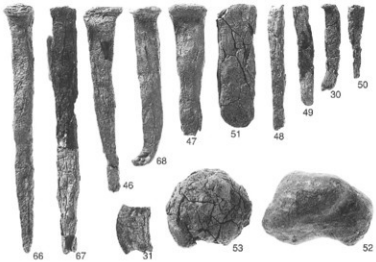
13・15区出土遺物

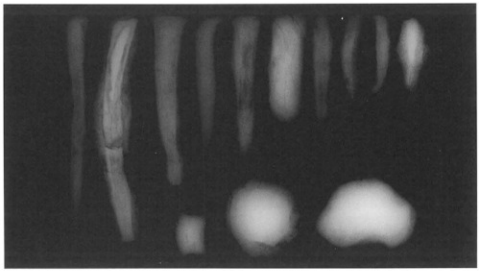


3区出土金属製品



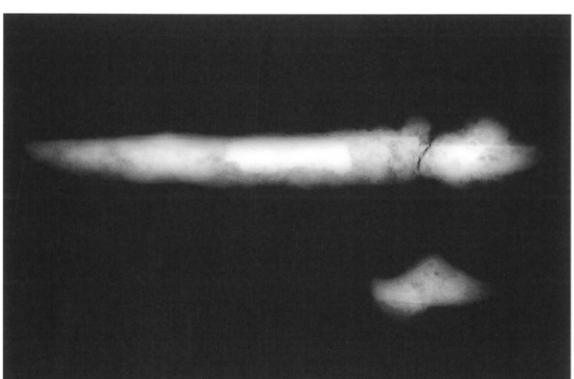
同X線透過像（1・7～11：3mA・60kVp・40sec／2・5・6：3mA・80kVp・40sec）



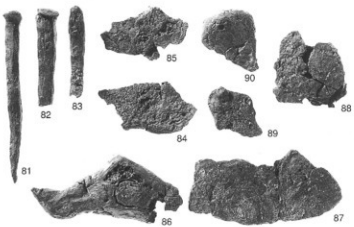


上・9区出土金属製品　下・同上X線透過像（30・31・49・50・52：3mA・60kVp・40sec／46～48・51・53・66～68：3mA・80kVp・40sec）

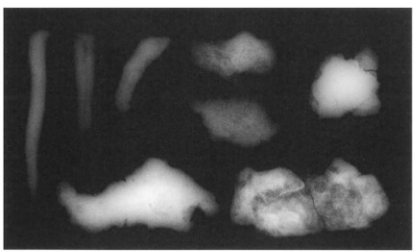
ST01　出土鉄製品



同上　X線透過像 (3mA・80kVp・60sec)



10－南区出土
金属製品 1

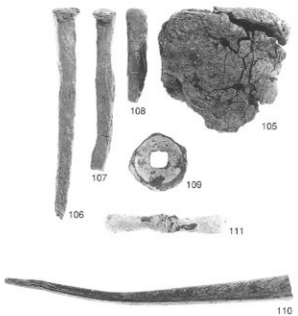


同上　X線透過像
（81・83～86：3mA・60kVp・40sec／82：3mA・80kVp・40sec）

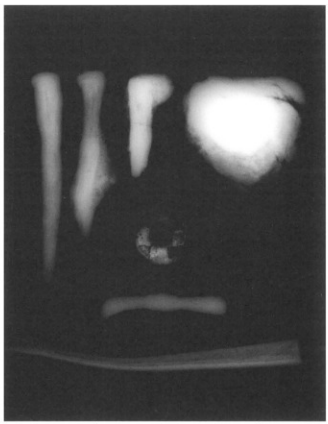
10－南区出土金属製品 2

同左　裏面

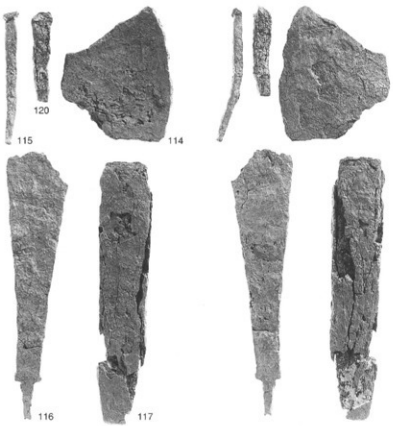
同左　X線透過像（3mA・80kVp・50sec）



11区出土金属製品

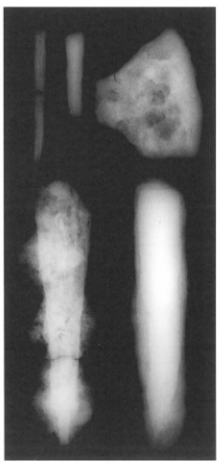


同左　X線透過像（108・110：3mA・60kVp・40sec.／105～107・109・111：3mA・80kVp・50sec.）

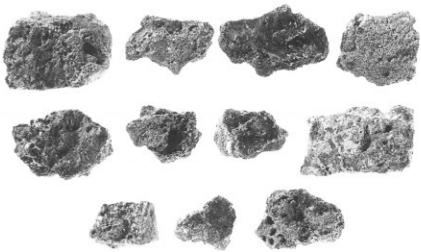


13区出土金属製品

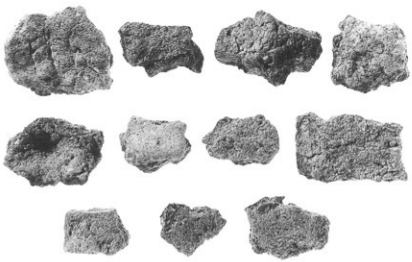
同左　裏面



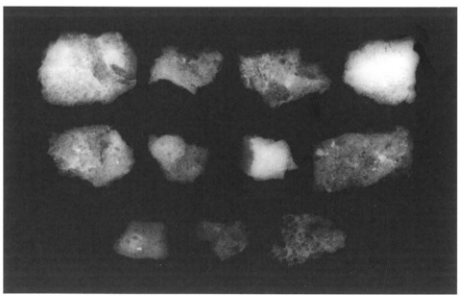
同左　X線透過像（114～116・120：3mA・60kVp・40sec.／117：3mA・80kVp・40sec）



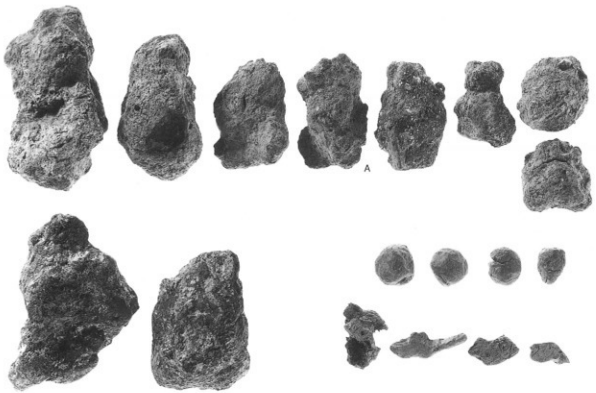
出土炉壁



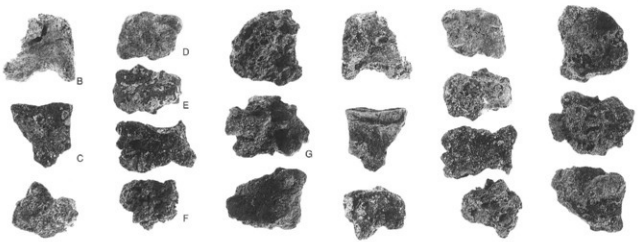
同上　裏面



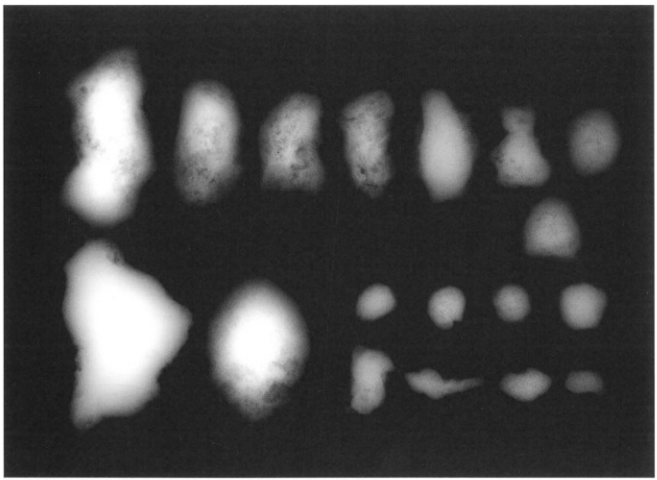
同上　X線透過像
(3mA・60kVp・40sec)



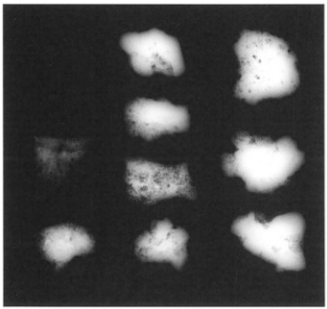
出土鉱滓1



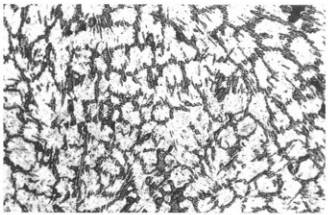
出土鉱滓2　　同左　裏



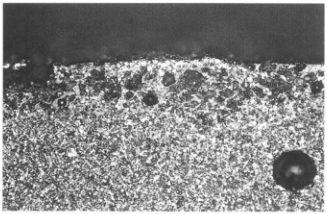
出土鉱滓1　X線透過像（右下8点：3mA・60kVp・40sec／その他：3mA・80kVp・50sec）



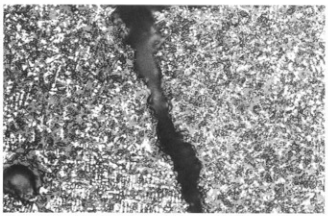
出土鉱滓2　X線透過像（3mA・60kVp・40sec）



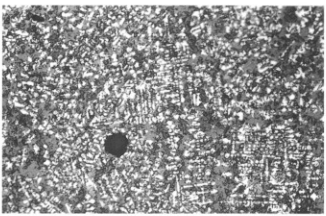
A　×50　鉄由来腐食物結晶



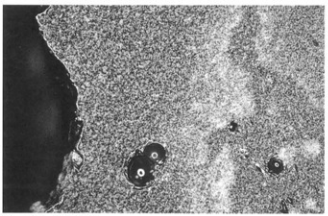
B　×200　ナイタルetch　表層部



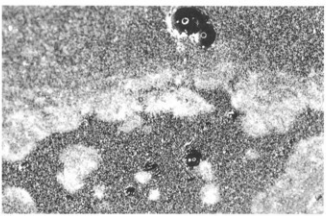
B　×50　ナイタルetch　クラック部ヴィスタイト



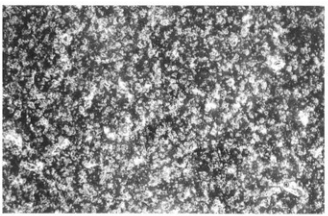
B　×400　ナイタルetch　粒状ヴィスタイト



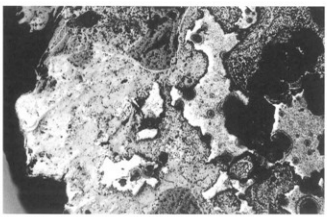
C　×50　非金属質



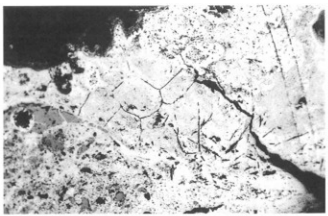
C　×50　非金属質



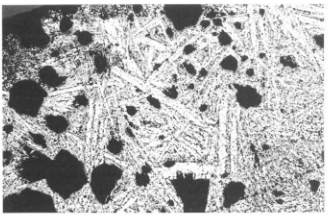
C　×100　非金属質



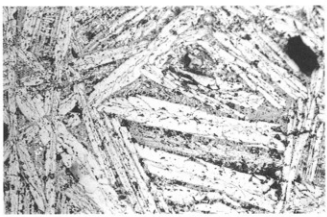
D　×50　ナイタルetch　非鉄金属介在



D　×100　ナイタルetch　組織粒状界（フェライト？）

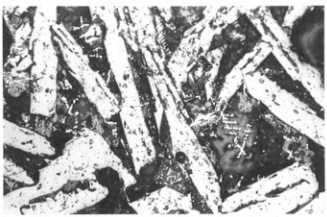


E　×50　ナイタルetch　ファイヤライト

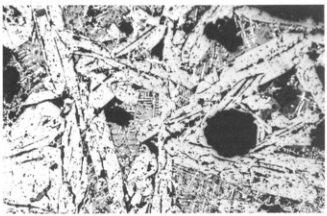


E　×200　ナイタルetch　ファイヤライト＋ヴィスタイト

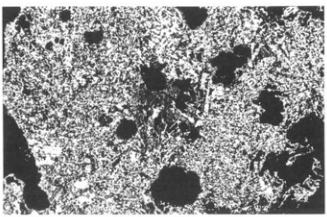
F　×100　ナイタルetch　ファイヤライト



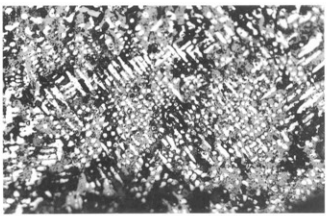
F　×200　ナイタルetch　ファイヤライト＋ヴィスタイト



F　×200　ナイタルetch　ファイヤライト＋ヴィスタイト

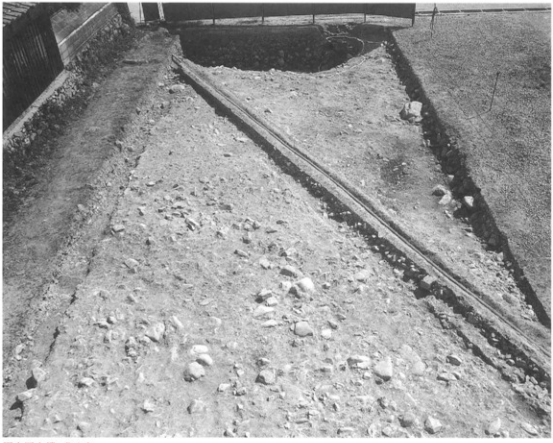


G　×50　ナイタルetch　非金属質介在



G　×200　ナイタルetch　ヴィスタイト

調査区全景　北より



調査区南端　北より